平成23年災害対応体験談集

その時、建設業は

緊急出動・対応の記録









一般社団法人
福島県建設業協会

平成23年災害対応体験談集

その時、建設業は

緊急出動・対応の記録

発行にあたって



一般社団法人福島県建設業協会
会　長　小野　利廣

早いもので、東日本大震災から３年目を迎えました。国内観測史上最大規模（M 9.0）の巨大地震と想像を絶する巨大津波により、太平洋沿岸地域を中心に未曾有の大災害が発生し、さらに福島県では、安全・安心と言われてきた原子力発電所の事故に見舞われました。また、同年７月には会津地方の全域が新潟・福島豪雨災害に見舞われ、９月には台風 15 号が当県を縦断し中通り地方の中部に被害をもたらし、福島県にとって、平成 23 年は県内全域で災害に見舞われた年となりました。犠牲になられた方や被災された方、そして原発事故による放射性物質の拡散で今もなお避難生活を余儀なくされている多くの方々に、改めて心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

さて、私ども建設業者は、自ら被災していながらも、災害発生の直後から国や県などの行政機関との災害協定に基づき昼夜を問わず、ライフラインや交通確保のための応急復旧作業を行いました。特に会員企業においては、人命救助活動をはじめ、行方不明者捜索、瓦礫処理に取り組み、さらに被災者の生活再建のための応急仮設住宅の建設を行い、加えて警戒区域で防護服を着用しながらの行方不明者捜索や学校・児童施設などの除染作業にも取り組んで参りました。

建設業界では、常日頃から地域社会の安全・安心やこのたびの震災など、災害と同時に初動活動に大きく貢献し社会的責任を果たしている自負がありました。しかしながら、災害対応では自衛隊や消防、警察等の活躍が多方面で紹介され世間の評価は高いが、同様に被災現場の最前線で人命救助活動や行方不明者捜索、道路啓開作業などに取り組んだ建設業の活動を紹介しているものは多くなく、私どもに対する世間の評価には大変厳しいものがあり、誠に残念なことと感じております。

このような状況から当会では、少しでも、災害対応において建設業が果たした役割と使命を世間の皆様にもご理解いただくとともに、その活動状況を後世に正しく伝え、今後の災害対応策に活かしていきたいという思いから、被災現場等で活躍した建設従事者や指揮した方々の体験談を取りまとめた「平成 23 年災害対応体験談集」を発行しましたので、是非ともご一読をいただければ幸甚に存じます。

今後、建設業界といたしましては、福島県が策定した「復興ビジョン」や「復興計画」、及び新たな福島県総合計画「ふくしま新生プラン」に基づく県土の早期復旧・復興に取り組むこととしております。加えて、県民が安心して暮らすことのできる環境を取り戻すための除染作業などにも積極的に取り組み、会員一丸となり県民の負託に応える所存であります。

最後になりますが、災害時には全国建設業協会をはじめ各都道府県建設業協会及び関係団体の皆様より、心温まるご支援と励ましのお言葉を賜りましたことに衷心より御礼を申し上げますとともに、体験談集の発行にあたり、早期復旧・復興の施工等で大変ご多忙の最中、体験談の執筆及び取材にご協力をいただきました皆様に厚く感謝を申し上げ、発行にあたってのご挨拶といたします。

C O N T E N T S

発行にあたって
一般社団法人福島県建設業協会　会長　小野利廣…… 1

支部所在地マップ…… 4

体験談［東日本大震災・原発事故］

1．応急・復旧作業

「復旧工事の教訓を後世に伝えたい」
（県北支部）小林土木株式会社　取締役工事部長　髙橋武幸…… 7

「情報入らず、放射能への対応に苦慮」
（県北支部）佐藤工業株式会社　土木本部土木部長　鈴木和則…… 8

「経験則を活かした災害対応」
（二本松支部）石橋建設工業株式会社　土木部次長　遠宮善紀…… 9

「緊急時の判断力」
（田村支部）三和工業株式会社　工事部長　樽井鉄男……10

「原発避難者のルートを確保せよ」
（田村支部）株式会社渡辺建設　常務取締役　横田松一……11

「藤沼湖崩壊で濁流、地元建設業が連携し対応」
（須賀川支部）株式会社赤羽組　代表取締役　赤羽　隆……12

「復旧・復興をめざして」
（いわき支部）堀江工業株式会社　土木部係長　谷岡慎太郎……13

「未曾有の大震災で経験したこと」
（いわき支部）株式会社渡辺組　土木部主任　渡辺貴生……14

「東日本大震災後の道路・建物等の応急復旧作業への従事」
（いわき支部）株式会社渡辺組　土木部係長　戸田　利広……15

「東日本大震災からの 1 年間」
（相馬支部）庄司建設工業株式会社　土木工事部　木幡修政……16

2．行方不明者捜索、ガレキ処理

「東日本大震災・行方不明者捜索など災害対応」
（石川支部）株式会社小浜組　工事係長　佐川　司……18

「東日本大震災余震による土砂崩落での行方不明者捜索活動」
（石川支部）株式会社福産建設　代表取締役　吉田一治……19

「72 時間にかける “5 世帯 13 人不明 ” の救出作業」
（県南支部）福島県南土建工業株式会社　土木部　池田利宣……20

「磐梯山の麓から相馬へ」
（猪苗代支部）東信建設工業株式会社　工事部
佐藤文博、神　守、加藤末雄、笠間誠一郎、鈴木宗一……21

「豊間地区の行方不明者捜索活動に参加して」
（いわき支部）堀江工業株式会社　土木部積算係長　吉田道一……22

「トモダチ作戦」
（いわき支部）堀江工業株式会社　土木部主任　木田晶広……23

「ひとのつよさ」
（いわき支部）堀江工業株式会社　土木部主任　久保田宗拓……24

「復興をのぞんで」
（いわき支部）堀江工業株式会社　土木部主任　渡邊英誉……25

「復興を望んで」
（いわき支部）堀江工業株式会社　土木部　下山田健人……26

「東日本大震災を経て…」
（いわき支部）堀江工業株式会社　土木部　安齋直也……27

「国道６号線 四ツ倉～久之浜間 瓦礫撤去」
（いわき支部）株式会社渡辺組　土木部係長　清水　仁……28

「震災と向き合って」
（相馬支部）庄司建設工業株式会社　建築工事部　豊田英敏……29

「放射線との戦い誇りに」
（双葉支部）田中建設株式会社　工事部長　冨士田一夫……30

「地元の再生に尽くす」
（双葉支部）田中建設株式会社　元工事第三部長　脇坂　薫……31

３．仮設住宅建設、除染作業

「応急仮設住宅への対応」
（県北支部）菅野建設株式会社　代表取締役　菅野日出喜……32

「リスク排除最重視の計画策定及び実行」
（二本松支部）石橋建設工業株式会社　営業課長　眞船孝治……34

「被ばくに細心の注意、高濃度の稲わらを撤去」
（郡山支部）公益土木株式会社　工事部長　佐藤隆雄……35

「大震災と除染」
（県南支部）福島県南土建工業株式会社　土木部　玉木和雄……36

体験談［新潟・福島豪雨災害］

「新潟・福島豪雨災害を体験して」
（宮下支部）大和建設工業株式会社　常務取締役　長谷川秀夫……39

「金山町滝スノーシェッドの災害復旧について」
（宮下支部）滝谷建設工業株式会社　土木部　田崎清喜……40

「二本木橋周辺の災害対応について」
（宮下支部）山十建設株式会社　代表取締役　滝沢康成……41

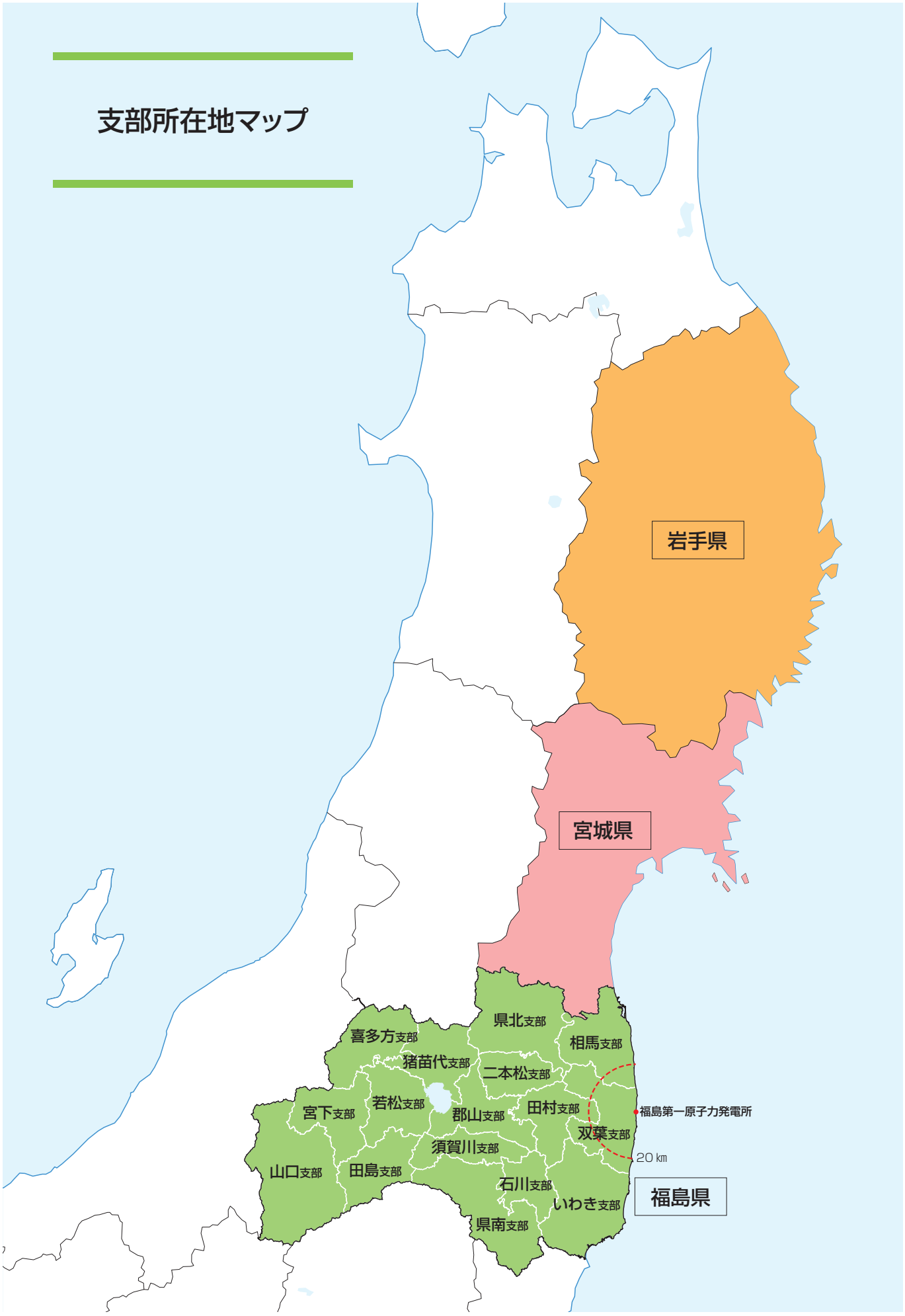
「混乱の中、道路の応急対応に全力」
（喜多方支部）株式会社丸正　部長　菊地達男……43

「地域の力で非常事態を乗り切る」
（山口支部）大正工業株式会社　代表取締役　三瓶吉夫……44

体験談［台風 15 号災害］

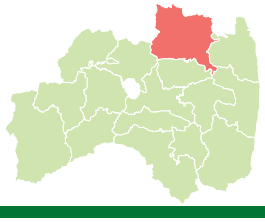
「台風 15 号の復旧対策」
（郡山支部）福島県建設業協会郡山支部　支部長　佐藤彰宏……45

支部所在地マップ


岩手県
宮城県
県北支部
喜多方支部
相馬支部
猪苗代支部
二本松支部
若松支部
宮下支部
郡山支部
田村支部
福島第一原子力発電所
双葉支部
須賀川支部
20 km
山口支部
田島支部
石川支部
いわき支部
県南支部
福島県

東日本大震災等の災害対応における体験談

県北支部





小林土木 株式会社
取締役工事部長　髙橋　武幸

復旧工事の教訓を後世に伝えたい

液状化で下水道に甚大な被害、応急修繕開始

3月11日は福島市の蓬莱団地内で下水道工事を行っていました。管路の更生工事に伴うマンホールの蓋を取り替えて工事が完了するところで2時46分になりました。

とりあえず仕事を中断して会社に帰ろうとしたのですが、市内につながる道は渋滞。国道4号が伏拝で土砂崩れのため通れませんでしたから2時間半かかって街まで降りてきました。次の日の朝､役所から連絡を受けたことは｢道路のマンホールが飛び出ているところがある｣ということでした。本社近くと庭坂街道、西中央から何日かかかって直しました。松北団地の被害が大きく、松北公園の脇から汚水が溢れてしまいましたので、12日にポンプをセットして丸1年間、次の工事が発注になるまで現場事務所を設け、人を配置して昼夜管理しました。月に一度は汲み取りを行い、維持しました。



国見町のマンホール突出状況

日本下水道管路管理業協会が管路調査進める

発災からすぐに、市内全個所のマンホールを開けて確認する調査を市内の日本下水道管路管理業協会（管路協）の仲間、新潟県から5社ほど応援を得てパトロール。異常がある箇所を福島市に報告して、管路内の調査に入ったわけです。管路協は全国ネットなので、震災時にはこれまでも助け合ってきました。管路の調査は、管内に溜まった下水をバキュームで吸い上げてから洗浄し、ロボットに積んだテレビカメラを入れて見ます。洗浄の段階で水が流れなければ異常です。



強力吸引車による滞水汚水吸引状況（新地町）

昨年7月まで福島市、国見町、伊達市、桑折町のほか、当社は新地町の管路調査も行いました。国見町だけで10キロ以上調査しました。

後で分かったことですが、放射線量が高い時はずっと外で管路調査を行っていましたから、従事した人たちには申し訳ない思いがあります。情報が全くなかった。

燃料不足、食料不足を協力して乗り切る

発災直後は燃料が無くなってしまいましたから、1台の車に相乗りして会社に集合。｢復旧に使うから｣ということで、ガソリンスタンドに協力していただいたおかげで軽油だけは本社で確保できました。それをダンプや重機、ディーゼルエンジンの乗用車に限定し対応してきました。

副社長が中心となって買い出しを行い、本社で炊き出しをしてくれました。私たちは朝と昼、余ったものがあれば夕食もいただき、ほとんど会社で食べていました。1カ月近く続きました。

復旧工事の教訓を後の世代に伝えたい

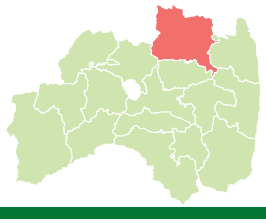
今回の震災で、インフラに何が起きるかは分かりました。

それを後世の人たちにどうやって伝えていくか。私たちは下水道の壊れた管路を直す工事をしていますが、中越地震の後、小千谷に半年ほど応援に行っていたので、当社の人間は経験済みで修繕するのに問題はなかった。ほかの業者の方にも現場を見てもらいアドバイスできた。福島の業者は、復旧に向けた作業を覚えたと思うので、仮に同じことがあっても対応できると思います。ただ、そのことを知らない世代がゼロからやり直しにならないように、映像で残していくことなどが必要なのかなと思います。



TV カメラ車による管内調査状況（新地町）

県北支部





佐藤工業 株式会社
土木本部土木部長　鈴木　和則

情報入らず、放射能への対応に苦慮

大規模な土砂崩れ、埋まっている人や車はないか試掘

地震発生時は、担当している東北中央自動車道長老沢地区道路改良（福島市飯坂町中野地内）の現場も揺れが強くて、車から降りられないほどでした。社員を家に帰し、私は会社に寄って帰宅。その日の夜に国交省福島河川国道事務所から電話が入り、国道４号伏拝の法面が崩れたという連絡と「1 トン土のうを作れないか」という要請を受けて、商社に資材を手配。次の日は、中野地内の現場に数社が集まって約 200 袋の土のうを作りました。

私は 13 日の夕方から伏拝の現場に入りました。斜面が崩れて道路東側、崩れた法面の上の朝日台団地は数軒が斜めになっている状態でしたし、国道には大型トラック１台とバン１台が土砂に押されて流された状態でした。ほかに土砂の中に埋もれている車がいないか、昼夜を通して試掘をしているところでした。幸いに埋まった車はありませんでした。確認が終わるまでは土砂の撤去ができなかったのです。



土のうを積みながらの土砂撤去

１週間で暫定２車線供用、昼夜の施工で土砂を撤去

崩れた土砂を撤去する方法を協議し、土砂は市街地中心部を迂回して十六沼公園に運搬して仮置きすることが決まり、ダンプや人の手配が始まったわけですが、燃料の確保が容易ではなかったため、国交省と当社でガソリンスタンドに交渉し、「燃料はこちらで用意する」という条件で来てもらいました。ダンプは一日に50台は走ったと思います。

昼夜、土のうを積みながら土砂を撤去、１週間後には暫定２車線を通しました。５月の大型連休前には４車線を復旧、その後、国交省で法面対策を検討し、復旧工事となりました。

発災からしばらく電話が使えず、現場と会社の連絡が困難でした。資機材の手配も困難で現場から会社に連絡し、会社の方で一本にまとめて手配する態勢をとりました。現場単位でやると、何がどうなっているのか分からない状況でした。命令系統を単純化する必要があったのです。４車

線を開放するまではこの態勢でした。私は 13 日の夜からずっと、社員も交代制で昼・夜の担当を決めて現場に詰めました。

原発事故の情報が入らない、食事は会社で炊き出し

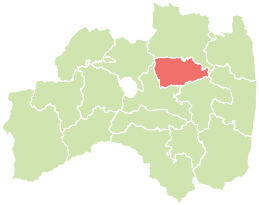
震災直後は、コンビニやスーパーなどから食料品が無くなりました。たまたま本社には井戸があって水が使えたものですから、食事については会社で朝昼晩と夜食のおにぎりを作って現場に持ってきてもらいました。

一番大変だったのは情報が入らなかったことです。原発事故がどうなっているのか全く分からないまま、作業を行っていました。一時は「原発が爆発しそうなので待機」という指示が出ました。14 日の夜は「一時退避」の指示があったと思います。その後は全員がマスク着用になりました。線量計を持っていなかったですし、雪や雨が降った日もありました。しばらくして、雨に濡れれば放射能に汚染されることが分かってきて不安が広がりましたが、国交省からは「とにかく進めてほしい」ということでしたので、土木部の社員全員と何人かの作業員だけで作業した日もありました。放射能への対応が一番大変だったと思います。



ダンプカーへの土砂積み込み

二本松支部





石橋建設工業 株式会社
土木部次長　遠宮　善紀

経験則を活かした災害対応

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分頃、私は本宮市内の工場増設工事現場で外構工事の後片付けをしておりました。人員確認を経て午後 5 時に解散後、会社に戻るとグループ企業の自動車学校のコースが被災、卒業を間近に控えた学生のカリキュラムを遅らせるわけにはいかないため、夜 11 時頃までコースの復旧作業にあたりました。

翌日からは、南達建設業組合と本宮市役所が連携、午前 8 時には私たちも市役所に詰め、作業内容の確認等を行った上、10 日間ほど緊急対応にあたりました。私は、土砂が流出し、全壊に近い大きな被害を受けた「青田新池」はじめ、一部崩壊で貯留水が流出した「大谷池」「蛇ノ鼻の 3 池」「大池」のため池 6 箇所の応急復旧に携わることとなり、3 月 12 日中に段取りを行い、3 月 13 日から 3 日間程度で被害拡大防止のための緊急処置を行いました。その後、さらに応急処置箇所の補強を行い、年度末の本復旧工事発注まで約 1 年間、管理を続けました。

最も神経を使ったのは、管理期間中の大雨対策でした。雨量によっては、ポンプによる強制排出や土砂流出防止の



仮沈砂地の設置も必要でした。二次災害防止が大切であるため、応急処置以上に神経を使いました。

大雨警報が発令されれば、待機状態となります。各自の連絡体制を万全な状態とし、パトロールは 2 名～ 5 名で班を編成し、実施しました。当社は国土交通省福島河川国道事務所から阿武隈川上流の河川維持管理を受注している

こともあり、降雨量の第一報が入りやすい環境にあったことも役立ちました。雨量が多いときは洗掘防止対策を施すなど、再度災害の未然防止に努めた結果、被害の拡大を防ぐことができました。

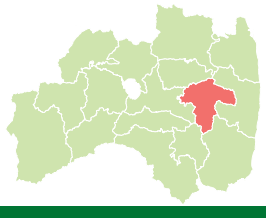
また、本宮市は以前から水害が度々発生している地域であるため、「災害慣れ」と言っては語弊がありますが、災害に対して各社それぞれの経験則を活かした対応をとることができました。災害対応において最も必要とするのは、燃料と電気です。3月12日の時点では、組合員各社保有のガソリンスタンドを押えるとともに、発電機も準備しました。市役所も独自にガソリンスタンドを確保するなど、初動期における準備を滞りなく行えたため、その後大きな支障を来たすことなく、対応できたと感じています。



市役所と建設業界の役割分担が明確であったことも、スムーズな災害対応をとることができた一因だと思います。当日の作業内容と人員等の配置を綿密に打ち合わせし、我々業界は資機材搬入及び緊急作業に特化、市役所職員が写真撮影や書類等作成にあたるなど役割がはっきりしていたため、大きな混乱もなく緊急対応に専念できました。

大震災への対応により、我々は新たな経験を積みました。これを教訓とし、次の世代に伝え、ふるさとの安全・安心を支えていくことが、我々地元建設会社の使命であると改めて感じています。

田村支部





三和工業 株式会社
工事部長 樽井　鉄男

緊急時の判断力

想定外の揺れ、さらには通信手段が途絶えた中、果たして会社は機能しているのだろうか。3月11日の地震後、私は田村市船引町の現場から会社への帰路を急いでいました。

整地や法面整形を進めている現場でした。突然携帯のアラームが鳴り響き、乗っていた重機からやっとの思いで降りて周りを見渡すと、土が絨毯のように波打ち、近くの小さなため池から水が飛び出していました。

国道288号の路面状況は、それほど酷いとは感じませんでしたが､自宅や会社へ戻る車が列をなしていたため､ルートを変更し、道路状況を確認しながら戻ることにしました。

一時間弱で会社に到着し、社員の所在確認や戻ってきた社員に状況の確認を行いました。

当社の道路維持管理区間は田村市船引町～大越町、富岡大越線などがメイン、市の管理分もあります。陥没箇所や橋台の段差摺り付けなどに対応し、バリケードなどで危険表示を行ったほか、落石除去、倒木の伐採など道路啓開を行いました。

初日以降は、合材による路面摺り付けや突出したマンホールなど市内の応急復旧と、あぶくま高原道路の応急復旧の二手に分かれての作業となりました。民間建築の災害復旧などには手が回らない状況でした。

原発事故により、3月15日午後から会社は一時休業となりました。当時、放射線の知識が全くなかったため、各地の放射線量が公表されるようになった頃、原発から比較的近いにも関わらず田村市の一部は線量が低く、本当に信用していいのか不安でした。

休業にはなりましたが、私をはじめ数名は出勤し、各要請に随時対応しました。避難所となった市体育館の下水詰まりや生活のための道路復旧などへの対応です。一方、避難所や遠方に避難した社員もおり、再稼働に向け常に連絡を取り合うよう努めました。

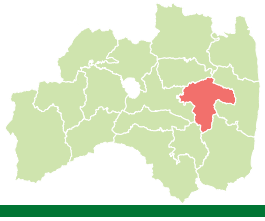
比較的状況の見えてきた3月22日から会社は再開しました。建設車両の軽油は何とか確保できたものの、ガソリン不足から、出退勤は地域ごとに乗り合わせで対応しました。

当社では、私が工事部を統括する立場になってから、毎朝７時半からの主任者の朝礼を欠かさず行い、工程などの確認を行っています。それぞれの現場を別個に捉えず、会社として一つの現場を請け負っているとの考えのもと、社員間のコミュニケーション、意思疎通を図るためです。

朝礼では、毎日担当を決め皆の前で話をさせます。自分の思っていることを、正確に分かりやすく伝えることができなければ現場代理人として務まりません。

人は思いもかけないような時にとっさの判断を求められます。あの日、あの時の判断は正しかったのか、その一言が相手の健康・命を左右する中で、冷静かつ適正な判断ができたのだろうかと、震災直後の壮絶な日々を振り返りながら自分に置き換えて時々考えます。

田村支部





株式会社 渡辺建設
常務取締役　横田　松一

原発避難者のルートを確保せよ

３月 11 日の地震発生時、私は会社近くの市発注の現場で測量作業中でした。地震を感じる前に、覗き込んでいたレベルが大きく振れました。一体何が起こったのだろうと思う間もなく地鳴りがし、近くの建物の揺れる音が響き渡りました。現場内の作業員５～６名も事態が把握できず、顔を見合わせ唖然とするばかりでした。

とにかく会社に戻り、通信手段が途絶えた中、社員の帰りを待ち、自宅で家族の安否などを確認した上で、可能な者は再度出勤してほしい旨の指示を出しました。

当社の道路維持管理区間は田村市常葉町全域と船引町移地区の全長約 50㎞。それぞれバリケードなどを持ち出し、段差、陥没箇所など約 30 箇所に危険表示を設置しました。

夕方には全員が会社に戻り、とりあえず今日は自宅に帰るよう指示しました。

会社に残った私は、余震が頻発していたこともあり、道路状況に再び変化が生じている可能性もあることから、危険表示設置箇所の確認も含め、再度パトロールに出ました。

県道常葉野川線の葛尾村側で、路面状況がひどい箇所を見つけ、土木事務所に連絡後、一旦会社に戻り、船引側からの通行止めの予告看板とバリケードを持ち出し設置しました。

翌朝７時頃、土木事務所から「レッカー車を５台用意してほしい」との要請がありました。その時点では、原発事故に関する報道はされておらず、意味が理解できずにいると「浜通りからの避難車両のトラブル対応のためのレッカー」とのことでした。

縦軸ルートが遮断された中、双葉地方の方々が県中方部に避難するためには、ルートはほぼ国道 288 号１本に限定されます。しかし、大熊町や田村市都路町などでは急勾配、線形不良箇所が多く、１台でもトラブル車があると、後続の流れが完全に途絶えます。社長とともに、即座に車両の確保に努め、大熊町の玉の湯を先頭に５台待機させることができました。

昼頃からは、会社近くの国道 288 号は避難の自家用車はじめ、ルートを絶たれた県外ナンバーのバスなどで過去に例を見ない渋滞が始まり､夕方まで続きました｡レッカーのオペレーターからは、２～３台のトラブル車両に対応したとの連絡がありました。

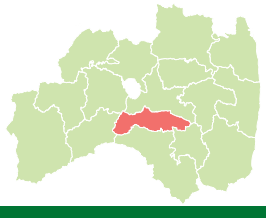
応急復旧作業も並行して進めていました。緊急避難経路となる国道 288 号田村市常葉町山根地内での地割れ、崩落などによる片側約 50m 区間の通行不能区間解消は、昼頃から７～８人で復旧作業を開始し、夕刻近くには２車線を確保できました。

第一原発１回目の爆発後、午後４時頃に最前線の玉の湯近くに待機していたレッカーのオペレーターから、警察から待避命令が出たとの連絡がありました。

以降、約 20㎞圏内への立ち入りが禁止され、応急復旧もままならない中、３月 14 日午前中をもって会社は一時休業となりました。

危険を顧みずレッカー待機、応急復旧に協力してくれた協力会社への感謝はもちろん、社員個々の使命感、会社としての団結力を垣間見ることができたと、あの数日間の経験を振り返りながら思います。

須賀川支部





株式会社 赤羽組
代表取締役　赤羽　隆

藤沼湖崩壊で濁流、地元建設業が連携し対応

東日本大震災の発生により、藤沼湖（正式名称は藤沼貯水池）の堤防が崩壊し、復旧には長沼地区の建設業者と連携して取り組み、須賀川地区全体でも、エリアごとに建設業者が全力で応急・復旧に対応しました。

今回の震災では、約 150 万 t の濁流が土砂や周囲の木々などを巻き込みながら鉄砲水となって一気に下流部に流出し、被害が拡大しました。

かんがい用のダムとして付近の水田を潤していましたが、下流の滝地区では、想像を絶するすさまじさで、死者・行方不明者のほか家屋も流出・全壊、床上・床下浸水など今も痕跡が残ります。

赤羽組本社周辺にも水があふれ、しばらくの間、建物の外に出ることができず、20～30 分後に水が引き、やっと外に出ることができました。

隣接する長沼小学校の敷地には水が流入し続け、たぷたぷの状況。携帯電話はパンクしてつながらず、メールは時間差があるものの何とか届く程度でした。

電話回線が戻って、須賀川市や須賀川土木事務所と連絡がとれるようになり、本社の各現場も自主的に引き上げてきたため、当日中に社員全員の安否を確認することができました。その後、バリケード設置などの作業に入りましたが、改めて事態の深刻さを認識しました。

市内では停電した地域もありましたが、幸いにも当社では停電することもなく、水道も数日間の復旧作業で済み、プロパンガス使用だったためライフラインの被害は比較的軽微で済みました。

藤沼湖の堤防が決壊し、流れ出た水のうち、簀の子川を流れ下った濁流は長沼高校わきの簀の子橋に押し寄せ、根がついたまま引き抜かれた 20m 以上の大木やガレキ類、土砂などが高欄を破壊し、橋げたと接続するコンクリート路面も破断するなど、自然災害の猛威を見せつけました。

本格的な災害復旧の着手に、藤沼湖に通じる簀の子橋の復旧作業は最も重要であり、急いで主要道路の復旧作業に取り組みました。

簀の子橋は、3 日程度で何とか応急処置を終え、その後、警察や自衛隊がここを通り被災者の捜索に向かい、行方不明の住民を捜索したのです。

道路復旧に続き、一般家屋のガレキ処理や汚泥処理に全力で取り組みました。行方不明になっている住民が埋もれている可能性もあり、重機で一気に除去することなどはできません。手作業を中心に、細心の注意を払いながら汚泥や土砂を除去し、民間住宅の後片付けを手伝いました。

復旧作業のために通常の業務をすべて ストップしていましたが、すでに処分してしまった自前の重機があれば、もっとスピーディーに対応できていたと思います。

藤沼湖の状況は、決壊当時のままですが、地元に根付く建設会社として、地域を守ることができ、住民の役に立つことができたと感じております。

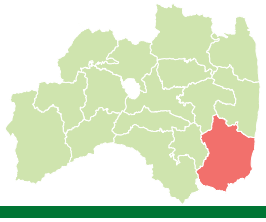


法面などが崩壊した藤沼湖



濁流で通行不能となった簀の子橋

いわき支部





堀江工業 株式会社
土木部係長　谷岡　慎太郎

復旧・復興をめざして

いわき市久之浜地区の道路啓開及び復旧作業
（H23.3.12 ～ H23.4.8）

いわき市久之浜町は、一部が原発から 30㎞圏内に位置する町で、波立海水浴場を有するきれいな町である。

H23.3.11、14:46‥‥巨大地震が発生 !! 私はこの地で海岸歩道設置事業として当日も仕事をしていた。いつもは波の音が心地よく聞こえる静かな町が、悲鳴と鳴き声、消防車のサイレンだけの異様な町へと変化した。すぐに高台へ避難し、携帯のメールで大津波の襲来を知り、怖さで体が震えた。

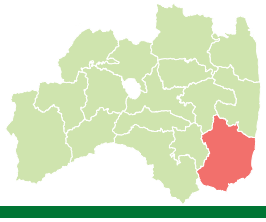
H23.3.12、久之浜町は一変していた。町中は焼け、家屋は崩壊し、国道 6 号は寸断されている等、慣れ親しんだ町は廃墟地帯と化していた。すぐに国土交通省と連絡をとり、久之浜地区の道路啓開作業にあたった。続く余震、そして連発する津波警報の怖さはあったが、協力会社と共に国道 6 号上まであがった消波ブロック、民家へ突き刺さっている車・大型車等の撤去を行った。

H23.3.14 ～ H23.3.15‥‥原発 3 号機、4 号機爆発。いわき市から人が消えた。それでも我々建設業は、引き続き被災者への食糧配付、人命救助のためのガレキ撤去を、自分自身が被災者である事を忘れ作業に当たった。大震災から 1 年数か月経過した今でも、道路復旧・ガレキ撤去を行っているが、東日本大震災の H23.3.11 から比べれば、ゆっくりではあるが復旧されている。私は建設業に携わる一人の技術者として、今回いち早くライフラインを確保し、一人でも多くの救わなければならない人命、被災者を救えた事を誇りに思っている。そして、建設業が担っている「物づくり」、地震に耐えうる物や津波に耐えうる物の重大さを痛烈に感じた。





いわき支部





株式会社 渡辺組
土木部主任　渡辺　貴生

未曾有の大震災で経験したこと

2011 年 3 月 11 日、普段と変わらず現場の施工管理に従事していた。

午後 2 時 46 分、携帯電話のエリアメールが鳴り響き、作業に従事していた全員が大した地震ではないだろうと、作業を中断せず続けていると、揺れが次第に大きくなり、危険を察知した私は、全員に安全な場所への退避を指示し、強震により足元がおぼつかない中、全員をなんとか安全な場所へ退避させることができた。

電話が繋がらず、誰とも連絡がつかない中、テレビをつけると、震度 6 強、大津波警報の発令と、初めて事の重大さがわかり、すぐに全員を帰宅させ、私自身も子供たちが比較的海に近い保育園へ入園していたこともあり、会社の許可を得て車を飛ばして迎えに行き、子供達を実家へ預け、すぐに会社へ向かった。

段差・陥没だらけの道路、傾いた家屋・電柱…帰宅する車輌でどの道路も渋滞を起こしていた。『早く会社に戻って復旧作業をしなければ』という思いに駆られながら、約 2 時間かかり会社に戻った。

社員全員が集まりきらない中、すぐに道路の段差解消作業の指示がおり、会社の 2t ダンプを走らせアスファルトプラントへ向かった。

合材を積込んですぐ、夜通しでいわき市内の常磐地区一円の道路の段差解消作業を行い、応急的に車輌を通すことができ、やっと自宅に帰宅できたのは翌日の夜だった。

次の日から、断水の中、ペットボトルのお茶で炊いたご飯で作ったおにぎりをもって道路のパッチング、仮設トイレの運搬などに携わり、原発の水素爆発による放射能という見えない敵に怯え、闘いながら国道 6 号四倉地区の啓開作業を行った。

沿岸部で作業をしている最中にも、度重なる余震が発生し、津波警報発令による高台への避難誘導を行うなど、常に危険と隣り合わせの作業であった。

その後、原発 3 号機の水素爆発により作業は中止され、会社への撤退指示がおりた。

3 月 15 日、全社員が本社に集められ、復旧作業にあたるコアメンバーを残して自宅待機となった。

その当時は、放射能の影響で市内から人が消え、物資が入らなくなり、ガソリンスタンドには長蛇の列ができた。そうなった時、もうこの住み慣れたいわきに居られなくなるのではという悔しい気持ち、そして悲しい気持ちがこみ上げ、家族全員涙しながらの日々を過ごしていた。





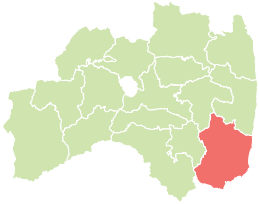
その後、放射能測定値も落ち着き、会社から再召集がかかり、いわきの街を早く復興に向かわせなければという強い思いを胸に、自分自身も被災者であることを忘れ、一心

不乱に復旧作業に明け暮れてきた。社内でも誰一人心折れることなく、それこそ津波で自宅が流された社員もいたが、不満も口にせず、皆一つになり、支援物資の運搬、給水活動など、他社、他業種の方たちと連携を図りながらの復旧活動を行った。

この経験により、人間の強さ、建設業の底力、絆の強さを垣間見ることができ、自分にとっても決して忘れることのできない、後世に伝えていかなければならない、大変な経験となった。

今日も震災による復旧工事を担当させてもらっていることで、この素晴らしい、大好きないわきの復興の一部を担っていることを再認識し、復興の先頭に立つのは建設業であるということ、また、このいわきで仕事ができる幸せと感謝の気持ちを一つのモチベーションにして、始まったばかりの先の長い復興を進めていきたいと思う。

いわき支部





株式会社 渡辺組
土木部係長　戸田　利広

東日本大震災後の道路・建物等の応急復旧作業への従事

3月11日の午後2時46分‥‥。あの大きく揺れ続いた地震が収まったのち、家族との連絡が取れず安否を確認するため、本社から自宅（内郷綴町）へ向いました。通行した国道6号は比較的損傷が少なかったのですが、通常15分の通勤時間のところ、渋滞のため1時間以上も掛かりました。妻と子供達2人の全員の無事と被災状況を確認したあと、また1時間以上掛けて本社に戻りました。

6時過ぎに着くと、本社の土木部では主に常磐地区の県道等のパトロールの実施、道路の段差解消の仮復旧作業、多方から要請のあった資材等の準備、被害状況の把握、連絡が取れないでいる社員の情報収集等、右へ左へと大忙しの状態でした。これから戦地へとおもむくような、あの殺伐とした空気と空間は、生涯忘れることはないと思います。

私も同僚といっしょに要請に応じ準備していたところ、実家の両親からようやく連絡が入り、辛うじて退避できたが、いわき市久ノ浜地区にある実家が津波の被害で全壊したことを知りました。すぐに上司に事情を相談し、久ノ浜の実家に向かうことにしました。

渋滞の激しい国道6号を北上し、途中の四倉からはいわき浪江線を通り、2時間以上掛けて高台に退避していた両親を迎えに行き、私の家へと避難させました。

爆発音が鳴り響き、プロパンガスの臭いが充満する中、涙を流しながら燃えさかる生まれ故郷の町を後にしたことも、同じく生涯忘れることはないと思います。

翌日の12日からの2日間は、上司の許可を得て実家の片付けや、かろうじて使えそうな生活品の運び出し、両親の心のケア等を無我夢中でこなしました。





あとで同僚に聞いた話ですが、比較的被害が少なかった土木部の社員は、寝る暇も惜しみ交代で各自治体や民間の顧客の要請に応じて、応急復旧作業に従事していたようです。先細りになっていた建設業界の中で、地域社会へと直結する重要な世界だということをあらためて痛感しました。

3月14日の月曜日からは、通常の勤務に復帰しました。あいかわらず殺伐とした空気と空間の中、県道や民間の顧客

への応急復旧作業と、新たに要請のあった各避難所への緊急物資輸送等を、余震に怯えながら必死で従事しました。

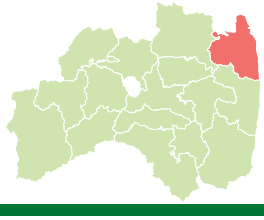
途中で福島第一原発の水素爆発があり、いわき市の住民が次々と県外へと避難していく中、自分も家族の安全を考慮し、数日間同様に避難しました。

数日後にいわきに戻ってきてからは、家族の食料確保と自家用車のガソリンの調達に奔走しながら、勤務時間を忘れてしまうぐらい、前出の業務に取り組みました。県道の応急復旧作業に従事することが多かったのですが、業務を終えて本社に戻ると、また別の業務が待っている‥‥。そんな日々がしばらく続きました。

あらためてこの一年を振り返ってみると、記憶をたどって行く中で、思い出したくないものばかりが鮮明によみがえってきます。変わり果てた街並み、津波に飲まれた影響で粉々になった生まれ故郷、家族を失なった旧友の悲しみなどが。

そんな中、復旧と復興に携わる社会資本の整備をおもに、一年間を必死で頑張ってきました。この東日本大震災にて亡くなられた多くの犠牲者の方々のご冥福を祈りつつ、復興に向けてこの建設業界にて貢献して行きたいと思います。

相馬支部





庄司建設工業 株式会社
土木工事部　木幡　修政

東日本大震災からの1年間

道路啓開作業

3月11日は、飯舘村飯樋字宮仲で国道399号の県発注道路改良工事を施工していました。その日は地山掘削・残土運搬作業中でした。運搬路には亀裂が入りましたが、何とか運搬できるという事で、翌日も作業許可が出たので行う予定にしました。下請け社長より、今日の作業は中止にしたほうがよいのではという話が出て、10tダンプトラック6台を待機させていましたが、相談の上、作業を中止にし、9時には南相馬市原町区の会社へ戻りました。その日は、南相馬市原町区と小高区の被害状況を確認に行きました。両地区とも海側の低い所は水没していました。道路啓開作業の機械・人の手配も行いました。夕方、会社へ戻ると福島浪江線に避難者の車両事故に備えて4tユニック車で待機していた作業班が、自衛隊から避難してくださいと言われ戻ってきました。



3月14日に福島県から指示が出た道路啓開作業を開始しました。場所は南相馬市原町区泉字下渋佐地区の道路上の瓦礫撤去と、道路陥没部の応急復旧作業でした。昼前に余震があり、消防団の広報車から津波警報発令による避難指示で、すぐに作業を中断し高台へ避難しました。昼になり会社へいったん引き揚げたところ、今度は原発が爆発したという事で、その日の作業は中止になりました。

3月15日もいったん会社に集合しましたが、雨が降っており、放射能もあるという事で作業は中止になりました。その後は南相馬市原町区に会社があるため、20km圏内で屋内退避となり、会社は一時休業状態になりました。

応急復旧作業

4月1日に社長から話があり、応急復旧作業を開始することになりました。4月4日より南相馬市鹿島区北海老地区の水田が冠水した為、24時間体制で水中ポンプによる水替え作業を行いました。現場ハウス、トイレ等を準備し、昼夜交代で寝泊まりしながらポンプの燃料補給を行いました。海のそばなので、ラジオをつけて地震津波情報収集に努めながら、車がいつでも退避できるように出船状態にしておきました。私はこの仕事を1週間程度行いました。

行方不明者捜索活動

４月８日からは、南相馬市原町区小沢地区で警察の行方不明者捜索活動の補助として 20㎞圏内へ入りました。作業内容は瓦礫撤去の重機持ち込み、移動・回送指示、作業指示、重機燃料補給です。作業場所は海沿いで津波の被害のあったところで、南相馬市原町区小沢地区から南相馬市小高区浦尻地区まで行いました。放射線防護装備は、南相馬市から支給されたタイベックスを着て、マスク、ゴーグル、ゴム手袋、長靴で行いました。毎日の作業終了時にはスクリーニング検査を行い、外部被爆量が安全である事を確認しました。５月 23 日までこの作業を行いました。

施工途中の現場応急処置

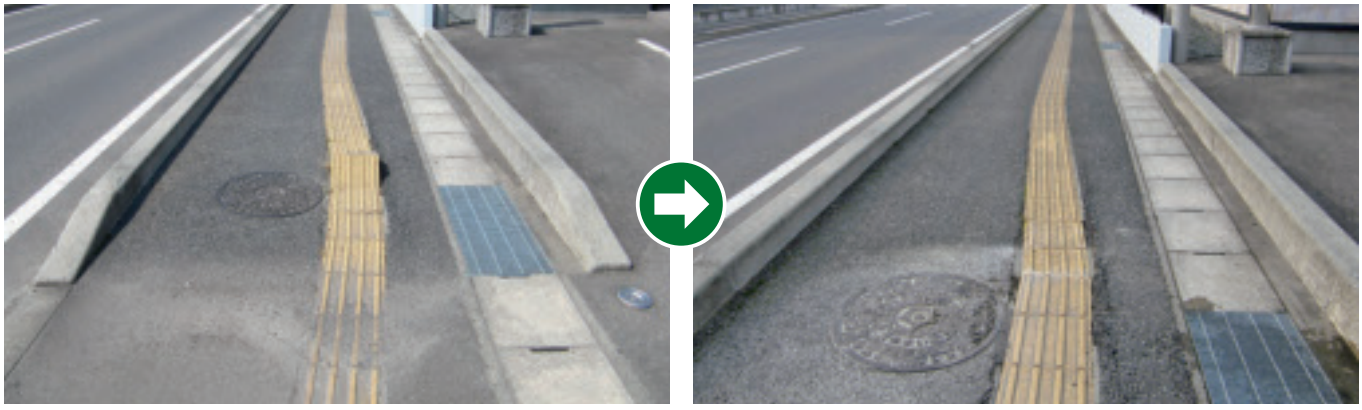
飯舘村飯樋字宮仲の県発注道路改良工事が施工途中なので、応急処置だけを１週間程度行うことになりました。地上 1m で５μsv/h、側溝の枯葉が溜まっているところは 110μsv/hでした。そこには近づかないようにしました。作業内容は、土砂流出防止の為、大型土嚢による土止め、沈砂池、素掘り施工でした。その後、施工書類をまとめ工事の検査を受けました。

災害復旧工事

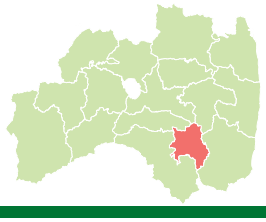
７月からは県道道路維持の為、車道･歩道の陥没部、パッチング、亀裂処理等の施工を行いました。場所は南相馬市原町区、飯舘村等です。それと並行して８月からは、県道小浜字町線の道路災害復旧工事を行いました。その後、２月からは相馬市松川浦地区で堤防の施設災害復旧工事に従事しています。現場は海岸線の近くなので、津波情報把握に努め、津波避難経路を定め、作業員に周知しています。







石川支部





株式会社 小浜組
工事係長　佐川　司

東日本大震災・行方不明者捜索など災害対応

震災直後

3月11日、震災直後に石川土木事務所からパトロールの要請を受け、路線を中心にパトロールを実施しました。翌12日には、協会会館に集合して国・県道のパトロールを実施し、国道118号・玉川村地内の法面崩落を確認し、車線規制を行ったほか、石川土木事務所への報告と対応の事前協議を行いました。震災後、数日間は携帯電話がつながらず、互いに連絡を取ることも困難だったので、とにかく協会会館に集合することを念頭に行動しました。

13日から復旧工事に着工し、3月いっぱいは応急復旧への対応に追われました。その中で、15日からは原発事故からの避難車両で交通量が増大したことや、福島空港やあぶくま高原自動車道が物資輸送の拠点として活用されたことなどから、主要幹線道路の交通を確保することに力を注ぎました。震災後の燃料や物資等の不足は、道路の重要性を実感するとともに、一般社会に周知させた面があるのではないでしょうか。

不眠での再出動

4月11日17時過ぎの直下型余震では、いわき石川線沿線2カ所で土砂崩落が発生しました。取り急ぎ主要幹線のパトロールを実施するとともに、う回路の案内表示を行いました。帰ろうと思った19時ごろ、石川土木事務所からの出動要請で、いわき市田人町石住字貝屋地内での住宅被災現場の救出作業に出動しました。12日朝、不眠不休の作業から帰ると、勿来土木事務所から石川土木事務所へ、いわき石川線の崩落現場で車が1台埋まっているらしいとの協力要請があった旨の連絡を受けました。不眠のまま、協会会館へ技術委員が集合し、資機材の打ち合わせを行いました。

救出作業

13日6時、技術委員8人がバックホウ2台、10トンダンプ3台を伴って、いわき市田人町石住字才鉢地内の現場に到着しました。すでにいわき側の作業員と警察、消防、自衛隊らが現着していたほか、一般人が数名いました。





土砂崩落現場での行方不明者捜索

現場では、土砂崩落時にタンクローリーが巻き込まれ、運転手と助手は無事ということが分かっていましたが、須賀川からいわきに通勤し、ちょうどその時間帯に同所を通る会社員と連絡が取れない、との通報からの作業着手でした。タンクローリーの証言では、後続車両は見えなかったとのことだったので、被害がないことを祈りながら、いわき・石川の両方向から作業を開始しました。行方不明者の捜索などは初めての経験で、当然、普通の工事とは勝手が違い分からないことばかりで悩みました。

結果的に16日17時半ごろ、タンクローリーの後方約

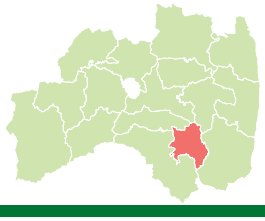
30 メートルで被害車両を発見しました。4 日間の作業中、遺族関係者から夜間作業の要請を受けたり、彼らが夜間に非常線内に侵入してスコップで作業しているらしいと聞いたりして、気持ち的には作業を継続してあげたかったのですが、2 次災害の危険からオペレーターを守らねばならない立場でもあるため、板挟みの思いで切なかったです。

協力体制に感謝

支部の技術委員として震災対応に取り組みましたが、各社それぞれの業務がある中、即座に対応することを許可した会社経営陣や同僚の配慮に感謝したいです。非常時に速やかに対応できる環境の根幹には、会社の理解とバックアップが不可欠で、緊急な事情下でも協力的にサポートしていただきました。

しかしながら、震災のような大規模災害はないのが一番です。行方不明者の捜索作業は、私個人としてはもうたくさんですし、後輩らにも経験してほしくないです。

石川支部





株式会社 福産建設
代表取締役　吉田　一治

東日本大震災余震による土砂崩落での行方不明者捜索活動

出動要請

東日本大震災から 1 カ月後の 4 月 11 日午後 5 時 16 分、いわき市を震度 6 弱の直下型余震が襲い、県道いわき石川線沿線の同市田人町石住地区で大規模な土砂崩落が発生し、民家 3 棟、車 1 台が巻き込まれ、4 人の命が奪われました。

石川土木事務所から、私の携帯電話に連絡が入ったのは午後 7 時ごろでした。「土砂崩落で人が埋まっている。いわきからは向かえないので急行してくれ」という内容で、状況も把握しきれないまま社員 4、5 人と重機 1 台を伴って急行しました。真っ暗な中で到着した現場には、警察や消防、自衛隊のほか、建設業協会石川支部会員の小浜組、佐川建設の社員らが先着していました。

繰り返す余震、緊張の中の作業

警察らの無線連絡など物々しい雰囲気の中、「住宅が巻き込まれ、2 人が埋まっているようだ」との指示を受け、慎重に作業に取り掛かりました。要救助者を間違っても傷つけないよう、少しずつ土を漉き取っていく作業は、本当に緊張感に満ちた作業でした。現場では、常に余震が繰り返されるほか、土砂の一部が河川をふさいだため、水量センサーが取り付けられていましたが、ある程度、水が溜まるとサイレンが鳴りだして、退避命令が出されるということを何度か繰り返しました。午後11時ごろに 1 人を発見しましたが、作業効率を上げるため、矢吹町の現場から重機を 1 台回収し、クラムタイプのアタッチメントに換装して現地に到着したのは12日午前 1 時頃でした。作業はスピードアップしましたがなかなか見つからず、午前 3 時ごろに警察犬が残り 1 人を発見し、警察らは撤退していきました。

夜を徹しての捜索活動









夜明けに気づく現場の実態

作業の後片付けが終わるころ、明るくなってきた現場を見て改めて恐怖心がわきました。現場は斜面の高さ約250メートル、横幅約100メートルにわたって崩れており、いつ2次災害が発生してもおかしくない状況でした。

同時にのどの渇きと空腹を感じました。救助作業は初めての経験で全くの素人。助かってほしい一心、生身の要救助者を傷つけてはいけないという極度の緊張の中で、作業中は感じていませんでしたが、緊張から解かれた安堵と同時に思い出したようです。

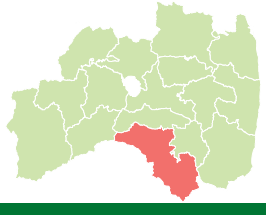
連携と地域雇用

緊急要請への対応だったので、状況が分からず、飲食物の準備もしていなかったのは誤算でした。計150人ぐらい出動していた消防や自衛隊と、水の融通などの連携はあってもよかったのかもしれません。

また、最近は重機をリースで賄う会社も増えていますが、地方・地域に根ざす企業として、重機を確保できる体制の重要性を痛感しました。特に数センチ単位での作業が求められた今回、腕のいい重機オペレーターがいたことは幸いでした。雇用の創出と併せ、直営作業をこなせる企業体力について考える機会となりました。

東日本大震災等の災害対応における体験談／行方不明者捜索、ガレキ処理

県南支部





福島県南土建工業 株式会社

土木部　池田　利宣

72時間にかける「5世帯13人不明」の救出作業

平成23年3月11日午後2時46分、白河市内震度6強の揺れに、葉ノ木平地区の大規模な地すべりの発生により13人の尊い命が犠牲になった。

当時の記録から、午後5時40分に白河市から葉ノ木平地区での地すべり災害に対する出動要請があった。災害の全体像が把握できていないので、何を準備していいのかわからなかった。直ぐに、災害現場に被害状況の把握のため社員3名を向かわせた。通信障害で携帯電話も固定電話も通じない。社員2人1組で、災害現場と会社との連絡係として被害状況を報告伝達する体制とした。それは平成10年8月末豪雨災害時の状況とまったく同じく、ライフライン施設が甚大な被害を受け、災害対応のための交通・通信手段がマヒした時の経験からの体制であった。今日は帰宅できないと覚悟した。

粘土化した大量の土砂が民家をのみ込み「5世帯13人が不明」であることがわかった。

災害現場には、100人以上の関係者が集まった。しかし、目の前を覆う土砂に人海戦術で撤去できる土砂の量ではなかった。「重機が必要だ」「土砂を運び出すダンプが必要だ」と災害現場から連絡があった。通信障害のなか、重機、ダンプの手配はできたが、重機を積んだトレーラーが現場手前1㎞の4号国道で1時間、交通渋滞のため足止めされた。本格的に救出作業が始まったのは午後9時前、発生から約6時間を過ぎようとしていた。

「生き埋めになった場合、72時間を超えると生存率が大幅に下がる」と災害対策本部から各担当者に説明があった。

救出作業は、連日３交代 24 時間稼働体制となった。

救出作業は、大量の土砂の下に何があるのかさえ全く分からず、難航を極めた。重機の近くで消防署員や自衛隊員らが待機し、何らかの痕跡が発見されると重機を止め、人力で掘り進めることの繰り返しで、思うように土砂を災害現場外に搬出できなかった。

地すべり発生から約 50 時間後の 13 日午後５時頃、約３メートル下から最初の犠牲者２人が発見された。最後の犠牲者が発見されたのは 23 日午前７時頃、発生から 12 日がたっていた。不謹慎であるが不明者全員が見つかって現場はホッとした。

犠牲になった家族、親戚等が遠くのテントから見守るなか、重機の運転手は、重機の中でおにぎりやパン等の食事をしたが、重機のエンジンを止めることはなかった。

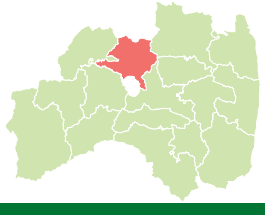
しかし、だれ一人助けることが出来なかった。平成 10 年８月末県南地区豪雨と今回の大震災で、自然災害を前にして人間は無力であることを痛感させられた。





東日本大震災等の災害対応における体験談／行方不明者捜索、ガレキ処理

猪苗代支部





東信建設工業 株式会社

工事部　佐藤文博、神　守、加藤末雄、笠間誠一郎、鈴木宗一

磐梯山の麓から相馬へ

「県から行方不明者捜索活動の支援要請が入った。うちにはフォーク（グラップル系）が１台ある。建設業の使命として要請を受けたいと思う。誰か行ってくれるか」。社長の問い掛けに「行きます」「私も行きます」、次々と手が上がり、現地に派遣するオペレーター５名がすぐに決まり、２名１組とするローテーションが決定しました。県からの要請は３月 20 日。現地の受入体制が整ったとして、相馬市原釜漁港周辺の現地に初めて入ったのが３月 31 日でした。以来、５月 18 日まで、原釜・尾浜・磯部地区において、自衛隊の指揮のもと、重機によるがれき撤去作業に取り組みました。

はじめは、がれきで埋め尽くされた道路の啓開。私たちの担当エリアは、住宅地で大型ダンプが入れないため、4t ダンプでピストン輸送を余儀なくされました。また、行方不明者の捜索活動が主眼であるため、がれきを一気に撤去するのではなく、一つ一つ取り除いてはご遺体が無いかどうか確認するという作業の繰り返しでした。



作業がはかどらないもどかしさも感じていたある日、大

型水路周辺のがれきを取り除くと、水に浸かりっぱなしだったご遺体が発見されました。余りにも変わり果てた姿に、胸が絞め付けられる思いとともに、「ようやく家族の元に帰れますね」という複雑な心境になったことを覚えています。それ以来、早く探し出してあげたいという気持ちがより強まりました。

会社があり、自宅がある猪苗代町も震度６弱を計測し、磐梯山が崩れるのでは――と思うほどの揺れを感じました。会社近くの県道も土砂崩れで通行止めとなったり、町内の土蔵が崩れたり、下水道のマンホールが浮き上がるなど、至る所で地震被害が発生しましたが、震災以降、テレビ映像を通して伝わってくる沿岸部の津波被害はその比ではありませんでした。「何とか力になりたい」と考えていた時の社長からの話に、全員迷うことなく行くことを決断しました。新潟県中越地震の際にも、現地入りしたい思いがありましたが、その時は叶わなかった災害協力がようやくできると思い、放射能に対する不安も多少はありましたが、それ以上に建設業に身をおく者としての使命感に包まれていた気がします。

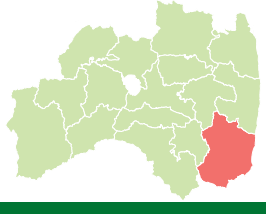


当初は、現地近くまたは福島市への宿泊も検討しましたが、最終的に片道約２時間半をかけてでも通うことに決めました。現地では、避難所から通ってくる業界の仲間もおり、遠くても自宅から通えるありがたさ、幸せを感じながら相馬に通い続けました。

何より、受入側の協力、そして、会社がバックアップしてくれたからこそ、我々の役目を成し遂げることができたものと思います。未だに、行方不明者がいる現実に憤りも覚えますが、建設業で働く者にしかできない貴重で大きな経験をさせてもらったと感謝しています。

最後に、津波被害に遭われたすべての方が、１日でも早く家族の元へ帰れることをお祈り申し上げます。

いわき支部





堀江工業 株式会社
土木部積算係長　吉田　道一

豊間地区の行方不明者捜索活動に参加して

３月 11 日、震度６弱の地震がいわき市を襲った。私はその時、会社の中にいたが、あまりの揺れの大きさに立っていられず、机にしがみついて揺れが収まるのを待つしかなかった。揺れが収まり、社内を見渡すと机の物は下に落ち、棚は倒れ、足の踏み場もない状態になっていた。外の様子が気になり、景色を見ると、崩れかかっている家や塀はあるものの、この時点では、大きな揺れの割に被害が少ないと感じていた。

しかし、家に帰り、テレビやラジオから次々と入ってくる情報を見て、聞いていく内に甚大な被害が出ているのに驚かされた。特に沿岸部は、津波により車や家と共に、多くの人々の命を奪い去ってしまった映像は、想像を絶する生まれて初めてと言っても過言ではない衝撃だった。

震災から数日が経過し、１日だけであったが自衛隊、警察、地元の消防団の方々と豊間地区の行方不明者捜索活動に参加した。捜索場所は沿岸部で、あの衝撃を受けた映像そのままの光景が目の前に広がっていた。ただ１つ違いがあるとすれば、映像では伝えることの出来ない独特の魚が腐ったような臭いがあることだった。

家は倒壊し、瓦礫で道は塞がれ、バックホウで少しずつ取り除きながらの作業となった。バックホウが瓦礫を取り除く度、行方不明者がいないか確認しながらの作業となる。私の心の中では、いなくてほっとしている自分と１人でも多く見つけてあげたいと思う自分が、葛藤しながらの作業が続いた。

又、作業では家族の思い出は残そうという事で、出てき





た写真や賞状等は持ち主が来た時に持ち帰ってもらう為、1箇所にまとめて置くこともした。写真を見ると子供が笑顔で写っているものや、おじいちゃんとおばあちゃんが仲良く2人で並んで写っている写真もあり、見ているだけですごく切ない気持ちになったのを覚えている。

私達の他に、私服姿の親子らしい人達が瓦礫の中から思い出の品を一生懸命探し出している光景もいたる所で見られた。自分の大切な人を失い、生活の場所を失い、財産までも失って、思い出だけは残そうと思って探していたに違いないと感じた。

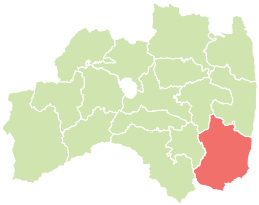
捜索終了時に、本日、見つけ出された行方不明者数が発表されたが、まだまだ見つけてもらうのを待っている人が大勢いる。一日でも早く全員が見つかればと思いながら捜索活動を終了した。

私には小学5年生と2年生の子供がいる。休みの日に、この震災をいつまでも忘れて欲しくないと思い、子供達を豊間地区に連れて行き、何もなくなったこの光景を見せながら歩いた。子供なりに何かを感じ取ったのか、驚いた表情で周りの景色をしばらく見つめていた。これから先、いつどのような震災が起こるかわからないが、子供達にはこの経験を生かして乗り越えていって欲しいと思う。

私自身も、二度とこのような震災で多くの命が失われないようにする為、この先、復興に向けて少しでも役に立てるよう頑張っていきたいと思う。

東日本大震災等の災害対応における体験談／行方不明者捜索、ガレキ処理

いわき支部





堀江工業 株式会社

土木部主任　木田　晶広

トモダチ作戦

H23.3.11 未曽有の大震災が発生しました。当時、私は海岸線から1㎞程度のいわき市四倉町鬼越地内の法面工事を担当していました。巨大地震の後、大津波警報が発令し、現場の作業員を法面上部までの避難を指示しました。その後まもなく、海岸線に白波が見え津波の恐怖を実感しました。

その後、昼夜間での復旧作業、避難場所への配給業務、道路啓開作業、行方不明者捜索活動に従事しましたが、3.15の原発4号機の爆発により、私達の業務も一時中断となりました。だが2日後の3.17には出動要請がかかり、



私達は自衛隊、警察と共にいわき市平豊間薄磯地区の道路啓開作業、行方不明者捜索活動に加わりました。あの状況は、紙と鉛筆で伝えることは困難です。

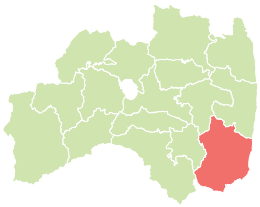
地震、津波の恐ろしさ、人命の尊さ、ライフラインの重要性、他県他国からの応援のありがたさ、見えない放射能の恐怖、短期間でいろいろ実感、再認識しました。

その中でも、3.17 の業務状況下で配られたおにぎりの味をいまだに忘れません。塩も梅干もなく、ただの白米でしたが、私にとって格別でした。

震災の復旧業務にて痛感した、困ったときにこそ助け合うという精神を、白い米を通し忘れずに、今後の復興に携わっていきたいと思います。

東日本大震災等の災害対応における体験談／行方不明者捜索、ガレキ処理

いわき支部





堀江工業 株式会社

土木部主任　久保田　宗拓

ひとのつよさ

いわき市平地区の津波直後の作業　（３月）

いわき市平沼ノ内・薄磯・豊間地区は、塩屋埼灯台を有する水産加工業の盛んな海と共に生きる地区である。

その平穏な地区が巨大津波の被害に遭い、変わり果てた姿を私が目の当りにしたのは３月 12 日の朝であった。１階部分の柱が折れ、床が見えない程の瓦礫に埋め尽くされて、その瓦礫を掻き分け捜索作業をすると目の前には‥‥。

自衛隊、警察、消防団を大声で呼びに行く。その人はつい昨日まで楽しく笑っていただろうにと思うと、胸が締め付けられる思いだった。

それから我々の作業は続いた。道路であったであろう場所を人が通れる道へ切り開くもの、瓦礫の山から一人でも多くの命を助けたいと懸命に捜索を続けるもの、崩れた家と家の間の人がやっと通れる様な隙間を危険も顧みず、ただ助けたい思いで黙々と我々の作業は続けられた。

いわき市平地区の解体作業　（７月～ 11 月）

震災後、再び津波被害を受けた地区へ私は配属された。

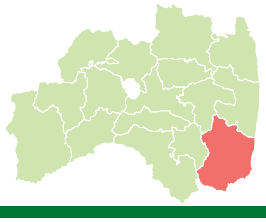
久しぶりに来た沼ノ内・薄磯・豊間地区は何もなかった。というよりは、瓦礫を撤去したからか妙に寂しかった。私の昔から知っていた家並みが廃墟の町へと変貌していた。その頃から私の解体作業が始まった。解体申請を出した方への解体予定日の連絡・解体作業の安全管理・当日の解体現場で発生する予期せぬトラブルへの対応等、市役所と現場を繋ぐ作業が私の業務となった。



被災された方の中には様々な方がいた。新築して住み始めて２日で被災された方や、子供の頃からここで過ごし苦楽を共にした大事な家を津波にて全壊にされた老人の方‥‥。解体日が決まると、約半数の方が解体初日に立会を求めてくる。私たちはその方々の話を伺いながら、時には一緒に哀しみ、我々の知り得る海岸地区の元気な情報をその方々へ提供し、一歩でも前進へと歩を進めてくれるよう業務を続けた。

一組の夫婦が語ってくれた「ありがとう。すっきりしたよ」の一言が、我々が行った業務に最大限の意味を与えてくれた。

いわき支部





堀江工業 株式会社
土木部主任　渡邊　英誉

復興をのぞんで

支援物資配送作業

私は、3月14日に会社の同僚と一緒に、災害対策本部から被災者の方々が避難している学校や公民館に衣糧を届ける作業を行いました。

災害本部から支援物資と運搬先を指示され、車両での運搬をしましたが、途中の道路は震災の影響で発生したひび割れや凹凸があり、徐行する事も多く、通常時より運搬に時間もかかり苦労しました。そして、やっと避難所に到着すると、避難所の中は非常に寒く、避難者の方々はみんな疲れ切った表情をしていました。そして、私達が支援物資を届けるとみんなの表情が明るくなり、大勢の方からお礼と感謝の言葉を頂きました。私達はその言葉を励みにして、他の避難所でも苦労しているたくさんの避難者の方のために車を走らせ、深夜までいくつもの避難所へ支援物資の運搬を行いました。

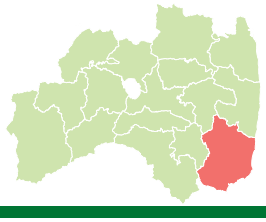
瓦礫撤去・行方不明者捜索活動

3月24日から数日間、薄磯地区の瓦礫撤去と行方不明者の捜索活動を行いました。3月11日の津波の影響により、薄磯地区は壊滅的な被害を受けており、10日以上経過しても瓦礫撤去は進んでおらず、まだ余震も多く津波が発生する事も予想されるなか、私達はすぐに避難できる準備を整えてから、携帯ラジオで地震情報を聴きながら、重機と手作業で瓦礫を撤去しながら道路を広げ、時には被災された方と一緒に家の片づけや、行方不明者等の捜索を手伝いました。撤去作業をしていると、震災前まで何事もなく平穏に生活していた事がわかる物がたくさん出てきます。それとこの被災状況を比べると、私は悲しい思いになり、作業を中断してしまいましたが、その時、被災された方々が『復興するためには、これを全部きれいにしよう！』と元気に言っているのを聴き、私はその言葉に励まされ、中断していた作業を再開し、前よりも前向きな気持ちで作業に取組む事ができました。

先日、薄磯地区へ行き撤去作業が終了したのを確認しました。私は他の地区も含め、津波で甚大な被害を受けた地区が一日でも早く完全に復興する事を期待しています。



いわき支部





堀江工業 株式会社
土木部　下山田　健人

復興を望んで

いわき市薄磯・豊間・沼ノ内地区の捜索・道路啓開及び復旧作業

平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災で発生した津波により多くの方が命を落とし、住み慣れた家・街を失った。震災発生時、今までに体験したことのない揺れが長時間続いた。すぐにラジオやテレビで情報収集を行い、事の重大さを知った。「大津波警報が発令され 10m の津波がくる。すぐ避難して下さい。」というものであった。当時、私がいた場所は海からほど遠い場所であったため、あまり実感がわかなかった。地震発生の次の日から、海水浴場として有名ないわき市薄磯・豊間・沼ノ内地区に捜索活動及び道路啓開のために行った時の光景は、生涯忘れることはないだろう。道路上には家やガレキがあり、もはやどこが道路なのかわからない状況で、自衛隊、消防、警察が必死に人命救助にあたっていた。恐怖のあまりしばらく体が動かなかった。当時、ここにいた人はどれほどの恐怖を味わったであろうか想像もできなかった。それと同時に、建設業に仕えるものとして少しでも彼らの役に立ちたいという思いになり、協力会社の方々と道路復旧やガレキの撤去など必死に行った。作業をする誰もが同じ気持ちであっただろう。残念ながら、1 年数か月たった今でも行方不明者がおり、撤去したガレキは放射能の問題で被災地に存置したままの現状である。

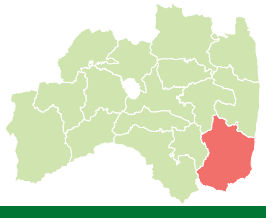
この大震災で得たものは何もない。我々はこの教訓を活かし、後世に何を伝えられるか、考えなければならないのであろう。







いわき支部





堀江工業 株式会社
土木部 安齋　直也

東日本大震災を経て・・・・

平成 23 年 3 月 11 日、PM2:46 に巨大地震が発生した。

当時、私は出張の為、群馬県桐生市の講習会場にいた。その時、ものすごい地響きと共に大きな揺れを感じ、尋常ではないことがすぐに分かった。会社、家族一切連絡が取れない不安な状態の中､すぐに帰還しようと試みたが､中々前に進めずにいた。福島に近づけば近づくほど信号は止まり、道路は分断され、家々が倒壊、未だ誰とも連絡がとれず、孤独と不安に苛まれながら、暗黒のいわき市へと帰還することができた。

会社に到着すると状況報告を受け、家族や同僚の無事が分かり安堵した。次の日から、家の片付けもままならないまま出社し、支援物資の搬送、行方不明者捜索、応急復旧作業といった活動をすることとなった。

翌 12 日、私は避難所への配給活動の任務に就いていた。各県から集められた食料を昼夜問わず、避難所から避難所へと駆けずり回っていた。支援物資を届けるという使命感で不思議と腹が空かなかったが、ようやくこぎつけた一つのパン、それを見た時、家族に食べさせようと思った。

次の日も配給を行った。避難所は段々と数が増え、人手が足りない状況であったが、協力業者のトラックも駆けつけ、何とか配給活動ができた。しかし、走れば走るほど給油が必要になっていき、自家用車での運搬も余儀なくされた｡その頃から原発が危ないから避難しろ､と囁かれだした。

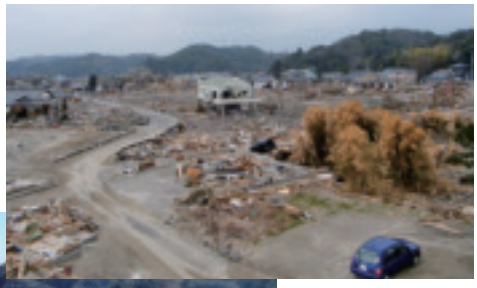
14 日、その日は捜索活動へ参加し、初めて大津波の被害をまじまじと見せつけられた。辺り一面瓦礫だらけであった。捜索チームは何班にも分かれ、建設業関係者、自衛隊、消防団、警察官が捜索活動を続けていた。捜索活動は震災時から続けられていて、精神的に疲れが見えていたが被災者の家族が見守る中、何とか見つけてやりたい気持ちだけが彼らの精神的な支えのようだった。

福島第一原発 3 号機、4 号機の爆発当日も、私も含め捜索活動の真っただ中だった。しかし、今日は警察関係者、自衛隊が足早に撤退していく、違う光景を目にした。残された建設業関係者、一部の市役所職員は撤退命令が下らない以上、捜索活動を続けるしかなかった。不安が徐々に大きくなる中、ようやく撤退の命令が下ったので、本日の作業は打ち切りとなった。それでも、被災した家族は現場を離れようとしなかったが、声を掛けると渋々現場を離れていった。

それからすぐに、いわき市から人が消えた。それでも被災者への食糧配布、瓦礫撤去作業に当たった。同時に徐々にライフラインが電気､水道､ガスと復旧していった。我々が知らない間に、他の建設業者が昼夜問わず作業を続けていた結果であった。家に帰ると水が出ることを喜んだ。

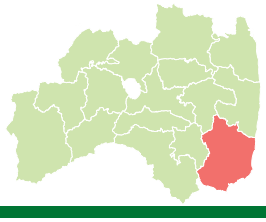
大震災から一年が経過した今、改めて建設業の団結した底力を感じ、道路復旧、瓦礫撤去を今尚、行っている。少しずつ復旧の兆しが見えるが、大震災の大きな傷跡は未だに残っていて、更に放射線問題が福島復興を邪魔しているが、前へ進むべく多くの関係者が日々復興を目指し前進している。多くの建設業者が未曾有の大震災に見舞われ、自分自身が被災者であるにも関わらず復旧復興に迅速に対応できたのは、普段から「物づくり」に携わっていた自信と経験、それがこうした災害に対し、先頭を切ってやらなければならない使命感が建設業には備わっていると感じた。

一般の人にとっては、騒音、振動など忌み嫌われている業種ではあるが、辛い、汚いを一遍に背負った我々建設業界は縁の下の力持ちであると、私は信じている。そして、自分もそうなりたいと大震災を機に強く思った。





いわき支部





株式会社 渡辺組
土木部係長　清水　仁

国道６号線 四ツ倉～久ノ浜間 瓦礫撤去

地震発生翌日の2011年3月12日、国土交通省磐城国道事務所の要請により、国道６号線の瓦礫撤去現場に入った。

現場（国道６号線 道の駅よつくら港前）は、津波のため舗装路面上に瓦礫が積みあがっていた。国道６号線を通行する車両は、それらの瓦礫の間をかろうじてすり抜けていくものの、路面上は堆積した砂が斑に広がり、路面も穴だらけの状態で、ノロノロと動くのが精一杯だった。

『とにかく、交通を確保する。』ことを目標に、人力と重機により１つ１つ片付けていく。当然、一般の通行車両も一時的に通行止めにし、片づけを行った。四倉港の直近ということもあり、国道上に数隻の大きな船が乗り上げていた。これらの船の片付けは、同じく国道事務所から依頼を受けた別の建設会社のグループが担当していたが、端から見ても『どうやって片けるんだ‥‥』という状況だった。これらの船の撤去を行うときも断続的に通行車両を止めた。



そんな時に、通行待ちの車の列の最後尾に一台の 4t トラックが並んだ。トラックの運転手が『原発にこの荷物を急いで持って行くように言われてんだけど』と、近くにいた私にボヤくようにつぶやいた。

『‥‥？‥‥ちょっとまってて！』この時、福島第１原発はまだ事故には至っていないものの、ひどく不安定な様子が報道されていた。

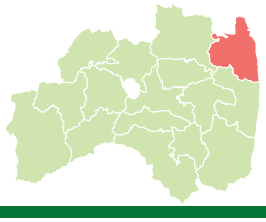
私は、船の撤去を担当しているグループに急いで知らせると、『何 !! 原発 !? わかりました !!』そこからの道路開放作業（船の撤去作業）は、本当に早かった。言葉は悪いが、その時の作業は【慎重、丁寧】は二の次で、【とにかく早く】というものだったと思う。

そして、私の話を聞いていた別のグループの人たちは、トラックより前方の開放待ちの車１台１台に、『すみません！原発行きの緊急車両があります。道路開放になってもしばらく待ってください。先に原発行きの車を通します！』と、１台１台の車に言って回ってくれた。誰に指示されたわけでもなく自発的に。

トラックは、最優先で通り抜けていった。みんな頼むように、拝むようにトラックを見送ったと思う。

原発の暴走は結局止められなかったが、社会を支えているのは、最後にはこういうことなのだろうと実感した。

相馬支部





庄司建設工業 株式会社
建築工事部　豊田　英敏

震災と向き合って

3月11日、東日本大震災により私たちの生活する福島県は大きな被害を受けました。請け負っていた現場はもちろん、多くの一般住宅も簡単には直せないほどの被害を受けていました。福島は直すだけでなく、沿岸部で津波の被害を受けた住宅では、解体作業も多く残されていました。

私自身も沢山の被災現場を見てきました。まだ経験も、知識も技術も少ないのですが、数件の現場を担当することになりました。

私が担当したのはケアサービス、住宅、工場等でした。多くの家はお年寄りの方々が多く、最初の頃は震災直後でもあったし、他人を家の中に入れるという不安もあったのか、作業を始める時と終わる時の挨拶程度しか会話はありませんでした。でも、次第に色々話してくれるようになったり、一服の時間にお菓子やお茶を出してくれたりして、少しずつ心を開いてくれている感じがしました。正直、建設業に入ってこれまで人との繋がりがあるとは思っていませんでした。震災の前後で、こんなにも建設業に対しての考え方が変わってくるとは思っていませんでした。そして、自分自身が建設業に携わっている意味についても。

私の地元も沿岸地域だったため、壊滅的な被害を受けました。もちろん、解体の依頼は私の会社にもきました。テレビや新聞など、メディアを通して津波の映像や写真を見るのは辛かったのに、まさか解体までやることになるとは思ってもいませんでした。実際に解体に携わることはありませんでしたが、会社での打ち合わせの度に地元の解体の話を聞いたり、解体場所の地図を見たら友人や知人の家だったり、休日に友人と地元に足を運べば自分の会社の旗や社名を目にしたり、正直辛かったです。足を運ぶ度に瓦礫は片付けられ、わずかに残った民家でさえ壊され、無くなっていく姿、ただでさえ思い出の物は全て流されて無くなったのに、わずかに残っていた町並みすら日に日に無くなっていく。震災後から思い出を無くし、家族を亡くし、悲しみに暮れる人を何人も見てきました。自分の住んでいた家も、部屋も、大好きだった景色・風景ですら、徐々に薄れていく恐怖も、そんな自分に対する嫌悪感も知っている。そんな多くの人々の思い出を壊すことに、直接は関わっていなくても自分が加担しているような気がして、みんなを裏切っているような気がして辛かった。

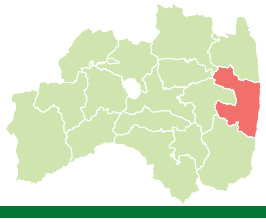
でも、「全然知らない人にやってもらうより、お前の会社でやってもらった方が、少なくともお前は俺たちの気持ちを分かってくれている。誰も何も思わず壊されるより良い。」そう言ってもらえたことが嬉しかったし、私が建設業に憧れを抱いたときを思い出しました。

誰かに感謝されるような仕事をしたい。少しでも誰かを笑顔に、幸せな気持ちにしたいと思っていました。今回の震災で、多くの人の笑顔が見られた。多くの人に感謝されました。辛いことも大変な事も多いけど、喜ばれたとき感謝されたときは本当に嬉しく思える仕事。これからも、誰かに喜んでもらえるような仕事をしていきたいです。



ガレキ撤去・家屋解体の様子

双葉支部





田中建設 株式会社
工事部長　冨士田　一夫

放射線との戦い誇りに

３月 11 日、東日本大震災の時に私は、川内村の五枚沢で道路舗装工事の社内検査をしていました。地震は経験したことのない強い揺れで、立っていられないほどでした。地震が一旦落ち着いてまず思ったことは、相双農林事務所発注の消波堤工事のため、たった今海岸で竣工検査をしているはずの同僚のことでした。「津波が来るぞ早く逃げろ！」。急いで電話すると、幸いにも午前中に竣工検査を終え、会社に戻っているとのことでした。とても安心したことを覚えています。

私も社内検査を打ち切り、会社に戻ることにしました。国道 288 号で会社に向かっていると、JR 常磐線の橋桁が落下していました。余震が続く中、橋脚に立てかかった状態でかろうじて立っている橋桁の隙間を通った時「これは大変なことになった」と強く思いました。

原発事故のため、私は関東で生活する弟妹の家に避難し、３月末には会社からの要請で福島県に戻りました。平日はいわき市で被災地に入る準備に追われ、週末に母親が避難する茨城県大洗市に戻る生活が続き、心身ともに疲れていましたが「地元のために何かしなければ」という使命感に燃えていました。

まず始めは、県からの依頼で双葉町に入り、４月 24 日から中野地区の双葉海水浴場の周辺で行方不明者の捜索を行いました。私のチームは７人でバックホウが５台体制。がれきの下に行方不明者がいるかもしれないと思うと、撤





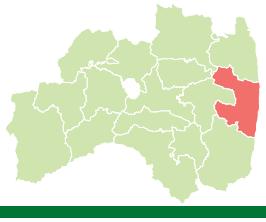
去作業はおのずから丁寧なものになりました。朝９時～午後３時まで８日間作業し、放射線量は日によって違いましたが毎時 12 ～ 17 μ Sv の間でした。双葉町の捜索では結局、行方不明者を発見できませんでしたが「一刻も早く見つけてご家族のもとに返してあげたい」と最後まで士気が下がることはありませんでした。

続いて、５月２日から入った浪江町では、大勢の行方不明者が見つかりました。ご遺体を発見したオペレーターはバックホウのアームを上げて周りに合図します。空高く上がったアームを見ると、見つかって良かったという思いと、原発事故さえなければもっと早くご家族のもとに返してあげられたのにという複雑な気持ちになりました。

浪江町での捜索は９月７日まで続きました。放射線量は毎時７～ 12μsv の間です。移動中も作業中も車両の窓は必ず閉め、食事も締め切った車内で済まし、体内被曝を防ぐためタバコも屋外では絶対に吸わないようにしていました。また、タイベックススーツと防じんマスクを着用しての作業だったため、暑さで体重が 5kgも減りました。

私たち建設業に携わる者は、3K などと揶揄されながらも、常に除雪や台風などで出動して地域貢献し、それが使命だと思っています。しかし今回、放射線を浴びながら、警戒区域も解除されていない地域に勇気をもって入っていけたことは誇りに思っています。

双葉支部





田中建設 株式会社
元工事第三部長　脇坂　薫

地元の再生に尽くす

目の前で「ガラガラドーン」という轟音とともに「ろうそく岩」が崩れ落ちました。移動中の車内で遭遇したすさまじい揺れと、目の前の信じられない光景に「これはただ事ではない。大変なことになる」と感じていました。

2011 年 3 月 11 日のあの日、私は楢葉町の木戸川橋橋脚工事の社内検査を終え、浪江町の請戸川橋旧橋撤去工事現場に移動中で、丁度、富岡漁港前にいました。車がバウンドするような激しい揺れの中、地元の観光名所が海の中に崩落していくのをただ呆然と見ていることしかできませんでした。

揺れが収まるのを待ってから、大渋滞の国道 6 号を避け裏道を通って請戸川橋へと向かいました。途中、双葉町の前田川橋で津波の第一波をやり過ごし、何とか請戸川橋に到着し、そこで巨大な津波に遭遇しました。津波は海岸の松林より高く、周辺の建物を飲み込みながら川を逆流していきました。私は何とか逃げることができましたが、あと 3 ～ 4 分避難するのが遅かったらきっと間に合わなかったと思います。

私は 3 月 31 日まで、避難所や川俣町のアパートで避難生活を送っていましたが、常に社長とは連絡を取りあって仕事再開に向けた相談を欠かさず行っていました。4 月からいわき市に移って本格的な準備に入り、4 月 24 日に行方不明者の捜索で浪江町に乗り込みました。

始めはバックホウ 7 台の 10 人体制でスタートしました。1 日でも早く、1 人でも多くの行方不明者を探したいと勢い込んで乗り込みましたが、想像をはるかに超える大量のがれきを前に任務の困難さを再確認しました。その後は認識を改め、重機をかき集めてオペレーターだけでも 60 人を超える大捜索隊になり、捜索が終了する 9 月までに、大勢の行方不明の方々をご家族のもとに返すことができました。

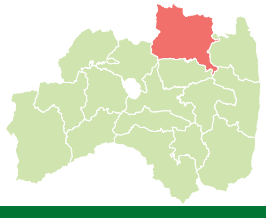
作業を進める上で、放射線の管理は重要でした。会社でも若い社員は絶対現地に入れないように配慮していました。現場でも線量計を携帯し、累積線量を計測していましたが、当初は線量が高かった。線量計は 1 μ Sv 上がるとブザーで知らせる仕組みでしたが、当時はいわきから現場に通う途中、富岡町夜の森以北は線量計のブザーが鳴りっぱなしの状態でした。また、避難所から通うオペレーターが仕事を終えて帰宅すると「放射能をもってくるな」と心無い言葉を浴びることもあったようです。

膨大な量のがれき処理や放射線による健康不安・風評被害、変わり果てた姿になった行方不明者を発見した時のストレスなど、過酷な環境の中でも仕事を全うできたのは、私たちがやらなければという使命感だけと思います。行方不明者も我々作業員も全員地元の人間です。今後も大きく変わってしまった地元再生のために尽くしたいと思います。





県北支部





菅野建設 株式会社
代表取締役　菅野　日出喜

応急仮設住宅への対応

『福島方式』誕生までの道程

平成 23 年 3 月 22 日、当協会の高木明義専務理事から建築技術委員長を仰せつかっている私に相談があると電話連絡がありました。県災害対策本部が、避難者向けの応急仮設住宅約 1 万 4,000戸、借上民間住宅約 5,000戸、公営住宅空家約 1,000戸、合計約 2 万戸の供給を発表した日でした。県が、災害協定を結んでいるプレハブ建築協会（以下、プレ協）に応急仮設住宅の供給を要請しており、地元業者で建て方を協力できないか打診されたとのこと。その時は、下請としての協力は難しい―との見方を示しました。

翌 23 日、県電設業協会の会長を務める大槻電設工業の大槻賢彌社長（平成 23 年 5 月 3 日没）に会うと、すでにプレ協の会員から下請の協力要請を受けたものの、余りにも単価が安いため断ったとのことでした。同様に、設備業界にも下請の協力要請が入っており、その日の午後、大槻会長、県空調衛生工事業協会の本多修二会長と千葉隆副会長、そして私の 4 人で会合を持ち、下請協力要請への対応について話し合った結果、「施工を手伝うと同時に、元請として協力したい」という結論に至り、部材調達に関して、考え得るあらゆる会社に問い合わせを始めました。すると、逆にメーカー等から「部材供給に協力したい」との提案も入り始めました。

3 月 24 日、部材調達に一定の目途がつきそうな感触を得たため、県に対して地元業者への発注を正式に陳情しよ



軸組組立状況



完成した仮設住宅

うということになり、当協会、電協、空衛協の三団体で知事と県議会議長に対して陳情書を提出。翌 25 日には、県建築総室に前日の陳情の趣旨を説明し、理解を求めました。

応急仮設住宅については、本県だけでなく宮城、岩手両県も含めて膨大な量になることから、資機材等不足の懸念とともに、納期内完成も危ぶまれておりました。我々としては、これは単なる仕事としてではなく、住まいを奪われ避難している県民に対して、地元業者として主導的に係わり、一日も早く避難所住まいから仮設住宅に移り住んでほしいとの想いを伝えました。同時に、県がすでにプレ協に対して応急仮設住宅の供給を要請している現実もありましたので、その後、すぐにプレ協県本部を訪問し、地元業者として直接受注の希望を持っていることを説明しました。その後、当協会の佐久間政文副会長、高木専務理事とともに県土木部の災害対策本部を訪れ、小柳秀一技監、佐々木孝男建築担当次長（ともに当時）等にも陳情内容を説明しました。

3 月 28 日に、県がプレ協及び県内の建設関係団体を集めて開催した「応急仮設住宅連絡会議」で私は、地元業者が応急仮設住宅供給に携わった証しとして、一部を地元業者に元請として担わせてほしいと表明、プレ協と地元業者で 1 万 4,000戸を早急に整備していく方向性を考えてほしい旨の発言をしました。

会議終了後、プレ協幹部との話し合いを持ち、地元業者の直接受注に関して「今回の災害は、個人のエゴを超越す

るもの。県が了承すれば、ダメとは言えない」との回答を得ました。地元業者による直接受注の芽が見えてきたため、連絡会議に参加した県建築大工業協会、電協、空衛協にも呼び掛け、四団体でプレ協県本部を訪れ、下請協力の意思を表明するとともに、改めて地元業者の直接受注について理解を求めました。その結果を県に報告するとともに、会員に対して応急仮設住宅の供給可能戸数についてアンケート調査を実施、その結果、当協会と大工協を合わせ、供給可能戸数は約 2,000 戸との結果が出ました。

また、部材等の調達に関しては、銀行からの新規借り入れ及び安定供給等を考慮し、建設業協同組合による一括調達に決めました。4 月 1 日、当協会と大工協、組合との三団体で県建築総室を訪問し、供給可能戸数が約 2,000 戸であること、部材調達は組合一括とすることを示し、改めて地元の直接受注を要望しました。

一部には、我々と並行して仮設住宅建設の意思を県に表明していた団体もありましたが、我々の動きが表面化してさらに、県内外の建設業協会以外の団体・業者の県への働き掛けも活発となり、県は 4 月 5 日、応急仮設住宅約 1 万 4,000 戸のうち、県内枠として 4,000 戸を公募すると発表、4 月 11 日から募集が開始されました。

当協会としては、大工協と合同で、木造 4 タイプ、プレハブ、コンテナ、ユニットの 7 タイプ合計 4,000 戸を応募しました。応募総数は、28 事業者 1 万 6,226 戸となり、4 月 21 日に開催された選考委員会を経て、翌 22 日夕方に結果が発表、資格要件を満たした 23 事業者のうち、12 事業者の 4,000 戸（木造系 3,500 戸、プレハブ系 500 戸）が選定、当協会としては木造 4 タイプで 950 戸、プレハブタイプ 350 戸の合計 1,300 戸が選定されました。

その後、応急仮設住宅は約 1 万戸の供給が上積みされ、同年 7 月に木造 2,000 戸の 2 次公募が行われました。最終的に地元業者が 6,000 戸を超える応急仮設住宅建設に携わったことは周知のとおりであります。

—— 福島方式成功のカギ ——

公募に際しての申請資料作成は、県建築士事務所協会の協力、単価構成の検討に当たっては、大工協の経験を基にした積極的な協力をそれぞれいただきました。また、JIA 福島地域会の会員の方には、木造仮設住宅の図面作成と配置計画で全面協力をいただきました。

施工は、建設地と戸数決定後、エリア内の支部に連絡し、各支部で担当会社を決定。電気及び給排水等設備は、エリア内の電協、空衛協会員への発注を原則として、お手伝いいただきました。

当初、無謀とも思われた福島方式の応急仮設住宅が成功したのは、最初に問題提起した高木専務理事、直接受注に理解を示してくれた県土木部の佐々木次長とプレ協幹部の存在が大きいほか、選考委員会で木造の仮設住宅を支持してくれた鈴木浩福大名誉教授、我々の要望を前向きに捉えてくれた当時の佐藤憲保県議会議長、県建設業協会の事務局スタッフなど多数の関係者の皆さんのお陰です。さらに、携わったすべての人の本県の復興・再生へ向けた強い想いがあったからこそであり、人と人とのつながり、一日も早い避難された方々への応援の気持ちが、従来の応急仮設住宅の供給体制に〝風穴〟を開けたと言えます。

また、当初段階でスクラムを組んだ大槻賢彌さんの志半ばによる急逝が県内業界の結束をより強め、想いを成就させた原動力となったことも忘れてはいけません。

結びに、今般の応急仮設住宅の建設に、自社の災害復旧、また施主お客様の応急復旧に忙しい中、仮設住宅への対応の主旨に賛同し、1 日も早い避難者の皆さまの受け入れの為、昼夜をわかたず施工にあたってくれた各会社様に改めて御礼を申し上げる次第です。大変お世話になりました。


感謝状

福島県建設業協会殿

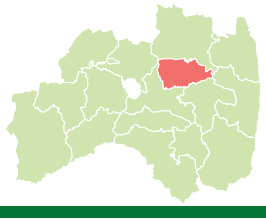
貴団体は東日本大震災に際し応急仮設住宅の建設の供給及び建設の促進等に尽力され被災者のための応急住宅対策に多大の功績をあげられました
第二十三回 佐生海月賞にあたりその功績をたたえ深く感謝の意を表します

平成二十三年十月十日

福島県建築士事務所協会長 川本正一郎


上棟式にて

二本松支部





石橋建設工業 株式会社
営業課長　眞船　孝治

リスク排除最重視の計画策定及び実行

東京電力福島第一原子力発電所事故に伴い飛散した放射性物質。多くの県民が不安感を募らせ、県外への避難を選択する県民も後を絶たなかった平成 23 年 8 月下旬、県建設業協会を通して、汚染稲わらの隔離一時保管実証調査工事に関する打診、説明会が行われました。

「誰かがやらねばならない仕事」として、当社社長が受注へ向けた検討を決断し、コスト検討及び図面作成の責任者として私が指名されました。

当時は、放射性廃棄物等に関する法整備も整っておらず、技術的な指針も無い状態であり、検討にあたっては様々な角度から検討を加えました。最重視したのは、作業員の安全確保でした。安全管理計画等は、アスベスト除去工事と同程度の内容にすることとし、発注者と何度も議論を重ね、時には激論も交わしながら、折衝を重ねました。

作業計画や安全管理計画、コスト等について折り合い、契約に至ったのは 10 月の半ばでした。一刻も早く対象物を移動させる必要性、作業員の放射線被ばくを可能な限り抑えるため､短工期かつ放射線源にはなるべく「触らない」「近づかない」作業計画とし､作業員にはタイベックスーツ、レベル 3 の防塵マスク、ゴーグル、線量計等を装備させました。

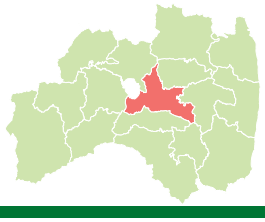
汚染した稲わらは、ロール状にされたものが対象でした。ロールを掴める農業用トラクタを借り、「触らない」を徹底して一時保管場所に移動させ、ロールの積み上げはラフタークレーンで行いました。

積み上げた稲わらロールは、塩ビ性遮水シートで覆うとともに、周囲は大型土のう（隙間は通常土のうで充填)、上部はコンパネを敷いた上に通常の土のうを 2 段重ねとし、40㎝～ 50㎝程度厚を確保、さらに遮水シートで覆いました。より安全を徹底するため、約 2m 外側に立入禁止柵を設置し、立ち入りを厳しく制限しました。

最も大変だったのは、高線量空間での作業における技術的知識・情報が無い中で、まったくの手探り状態からスタートせざるを得ないことでした。原発事故からおよそ半年が過ぎているにも関わらず、法整備が進んでいない現状、1 分 1 秒でも早く危険要因は取り除きたいと多くの県民が願っているにも関わらず、作業着手できないもどかしさに、悔しい気持ちで一杯でした。

実証調査工事第 1 弾という事情もあり、産みの苦しみと言うべきことがあったのかも知れません。しかし、大変困難な仕事ではありましたが、「汚染稲わらを生活圏から少しでも遠ざける」という所期の目的を、「作業員の安全確保を第一」に「可能な限りリスクを排除しつつ」達成できました。振り返ると、大変貴重な体験をさせてもらったと感じています。

郡山支部





公益土木 株式会社
工事部長　佐藤　隆雄

被ばくに細心の注意、高濃度の稲わらを撤去

一般社団法人こおりやま建設協会は、郡山市から高濃度の稲わらの撤去作業を受託し、会員各社から作業指揮者と作業員を募って、作業に取り組みました。

稲わらを撤去する作業は、市内 18 カ所で行われましたが、場所によってはピンポイントで測定した空間線量が 111 マイクロシーベルト／時に達するなど、放射線による汚染状況は予断を許しません。

今回作業を実施したのは、特に線量が高い 2 カ所で、このうち三穂田町山口地内の倉庫では、事前に測定した稲わら周辺の空間線量が 50 ～ 80 マイクロシーベルト／時を示していました。

ここに稲わらを埋設する場所はなく、倉庫内にＬ型コンクリートパネルを設置して中心部を囲み、このスペースに収納することにしました。

作業者の被ばく量を減らすために細心の注意を払い、近くで作業する時間を 1 日あたり 1 時間以内に決め、30 分単位で取り組みました。

８月の真夏の最中でもあり、撤去作業をするためには、全身を覆う専用の防護服をまとわなければならず、マスク、ゴーグルの装着も必要で、暑さ、息苦しさなど、尋常な作業環境ではありません。作業指揮者として苦労したことの一つは、目に見えず、人体に影響を及ぼす危険な放射線がそこにあることを、現場作業者に理解してもらうことでした。



倉庫内にＬ型コンクリートを設置し稲わらを保管

磐梯園の先崎弘通氏を中心に事前の作業を行い、倉庫内に積んだままだった稲わらを整理し、ロール状の稲わらを再び巻き直し、バラの稲わらは束にして 1 トンのパックに詰めました。

稲わらをいったん倉庫の外に運び出し、空になった内部をきれいに洗い流し、その後に基礎コンクリートを打設しました。倉庫の屋根が低く、既製品のＬ型コンクリート擁壁をフォークリフトで設置したところ、擁壁の外側は 1 マイクロシーベルト／時以下となり、目標数値を達成しました。

高濃度の汚染稲わらの撤去でしたが、作業員の一番高い被ばくの数値は 1．８ミリシーベルトであり、予想より低い数値に留めることができ、どうにか対処できました。

この現場に続き、二嘉組の志賀健一工事部長らを中心に郡山市西田町鬼生田地内で稲わらの保管作業を行いました。

ここでは、屋外に保管するためのスペースをＬ型コンクリート擁壁で確保し、1 トンパックの稲わらを隙間なく詰め込み、土を敷き詰めてコンクリート蓋で覆いました。

稲わら撤去では残念なことに、汚染物質の除去作業を行うことが市民に十分に周知されておらず、非公表・極秘の作業でもあったため住民に不審がられ、通報で警察が駆け

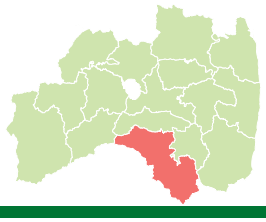


屋外に整備した稲わらの保管施設

つける事態も起こりました。何とか理解してもらいましたが、身近なところで放射性物質に汚染された物を除去していることが理解されずにいたようです。

放射線は、大人に比べて子どもに大きな影響を与えます。9～10月には、市立桃見台保育所で除染作業を行いましたが、子どもたちにはとても感謝され、終了後に笑顔で手作りの表彰メダルをかけてもらいました。

県南支部





福島県南土建工業 株式会社
土木部　玉木　和雄

大震災と除染

3月11日午後。年度末も押し迫った一日､私はアスファルト舗装の最中だった。場所は白河市内のJR白河駅近くの4車線道路。三日間にわたった舗装の最終日。路面切削が終わった箇所に、排水性アスファルトを敷均し締固める作業で、この日は180tの予定量。

ダンプトラック20台のうちの17台目が敷き終わり、残り3台というときに地震に襲われた。4車線のうち進行方向左側、追い越し車線部分の約50mが未施工で凹型に残ってしまった。

大きなゆれに引き続き信号は止まる。消防自動車、パトカーが走り回る。渋滞は始まる。携帯電話はつながらない。アスファルトを積んだダンプがいつ入ってくるかわからない。道路の車線規制は早く解除したいのだが、段差が付いていて、このまま開放すれば事故が起こるのは目に見えているのでそれもできない。通過する一般車両からは「こんな大変なときに工事していんじゃーネエゾー」との罵詈雑言はとんでくる。困った。困った。

そのとき関連会社が、すぐそばの市立図書館新設工事の駐車場舗装をしていることに気づいた。使用しているアスファルト合材は違うのだが、事情を話し材料をわけてもらった。摺り付け舗装を行ない、午後5時前に段差を修正し、規制を開放することができた。

その後、水道の断水。ガソリン、軽油の枯渇。食料の不足などの状況のなかで、土砂崩壊地の行方不明者救出支援。道路陥没箇所の穴埋めなどの対応にあたった。

ライフラインの整備が進むなか4ヶ月が経過し、白河地方でも放射能除染の話が出てきた。学校屋外の放射線量が高く、子供たちが運動場で走り回ることができるように、夏休み期間を利用して校庭の空間線量を下げようというものだ。

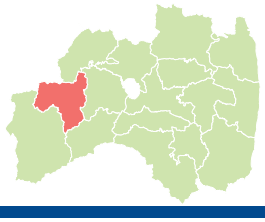


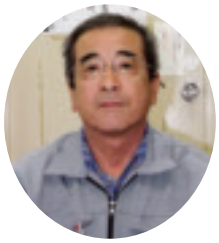
当社は、白河市立信夫第二小学校の担当となった。校庭の表面の土を5㎝程度すきとり、埋設しようというものだ。校庭内に埋設予定量を計算し､長さ40m幅15m深さ1.6mの穴を掘る。掘った土の深さ0.6m分は覆土として残しておき、残りは残土として搬出する。掘あげた箇所の底版、側面部に遮水シートを敷並べる。校庭内の土のすきとりは、広いところはグレーダーとショベルローダー、4ｔダンプトラック、バックホウの組合せで、ジャングルジム、鉄棒など遊具の付近は人力で集積する。集めた土は穴の中に1mの厚さに敷均し、固める。その上を新たな遮水シートで被覆し下部のシートと接合し、外部と遮断する。その上に0.6m土をかぶせることによって、放射能を封じ込めるというものだ。連日の暑さのなかゴム手袋、マスクを使用してのつらい作業だったが、これにより空間線量が0.3μSv/hに下がり、子供たちの遊ぶ姿が見られたのがうれしかった。

新潟・福島豪雨災害対応における体験談

台風 15 号災害対応における体験談

宮下支部





大和建設工業 株式会社
常務取締役　長谷川　秀夫

新潟・福島豪雨災害を体験して

平成 23 年 7 月 27 日の深夜から降り出した雨が、これほどの大災害を引き起こすとは想像もできませんでした。私自身、只見川支川の野尻川や山入川などが氾濫し、金山町山入地区では死者も出た昭和 44 年豪雨を経験していましたし、今回の雨は只見川上流の新潟県境で降っているということで、降り方も継続的ではなく「降ったり止んだり」といった具合だったため「もうじき止むな。たいしたことはない」程度にしか思っていませんでした。

28 日の午前 5 時ごろ、金山町で大雨警報が発表になり、6 時過ぎには県宮下土木事務所から町内の道路、河川パトロールの指示が出されましたので、町内のパトロールと、ちょっとした流出土砂の撤去作業を行いました。お昼過ぎには、土砂災害警戒情報も発表になっていましたが「まあ大丈夫だろう」と思っていました。平成 16 年豪雨と比べても降り方は激しくなく、通常程度の雨だったのです。

これは大変だと感じたのは、夕方午後 4 時ごろで、国道 252 号上田・水沼間の倒木処理を終えて事務所に戻った時です。只見川がかなり増水し始めていて、事務所隣の西谷橋の欄干から上流を見ていたら、どんどん水位が上がっている。自分が立っている場所では、雨はほとんどふっていないのに。濁流が左岸側の堤防を越えて田畑や東北電力の変電所に流れ込みました。ダムからものすごい水が放流され、JR 只見線の第 6 鉄橋まで水しぶきが上がっていました。信じられない光景でした。



流木の撤去作業

急いで事務所に戻ると、只見川の水位が堤防を越えるまで 1 メートルもないほどに迫っている。これは大変だと思い、急ぎ事務所駐車場や資材部にある車両の高台への運び出しを指示しました。午後 6 時 35 分には西谷地区に避難勧告が発令され、7 時ごろには堤防を越えて浸水が始まりました。本社のパソコン関係は運び出すことができましたが、プリンターなど OA 機器、机など備品は間に合わず全て水没しました。

午後 9 時ごろ、社員と 3 人で管轄地区のパトロールをしながら気になって事務所の近くまで来てみると、1 階部分のおよそ半分が水に浸かった状態でした。上流にある国道 252 号二本木橋が落橋し、金山町滝原から三島町早戸までの区間が全面通行止めとなったことを知り、大変なことになったと思いました。

復旧作業に取り掛かる

30 日の朝には事務所に戻り、水も引いてきたので社員を集め後片付けを始めようした途端、宮下土木事務所から連絡が入り、通行確保のための国道 252 号の西谷から越川間の排土と流木撤去を要請されました。避難して無事だったホイールローダとトラックを出動させ、町からの要請で冠水した西谷地区民家の周りの土砂排除などを行いました。

西谷地区 59 戸のうち床上浸水したのは 16 戸に達し、流れ込んだ土砂は深いところで 50㎝を超えていました。幹線道路は重機を使えるが、宅地内は機械が入れず、土砂排除は人海戦術しか手立てがなく、水を吸ってヘドロ状態の土砂をスコップで運び出しました。協力業者の皆さんにも協力してもらい延べ 900 人、約 1 カ月間かけて宅地内の土砂排除を行いました。一段落してから、ようやく事務所の後片付けを始めることができたのは 8 月末だったと記憶しています。

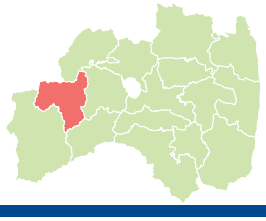
国道 252 号の流木撤去も 31 日から本格化させました。特に越川地区は、川の狭窄部で多くの流木が打ち上げられていました。流木は径が大きく大変な作業でした。上流を担当している山十建設さんと連携し、ホイールローダや散

水車などをやりくりして作業に当たり、８月４日までには土砂と流木の撤去を完了し、通行止めを解除させることができました。

今後は

今振り返ってみて、地元の安全、安心を守るのは自分たちだという思いを強くしました。中山間地域で、建設業は雇用確保の面も強い。地域の安全安心を守るためには、建設業が生き延びていかなければならない。そのためには若い力が必要。若手が入職できる雇用環境とするためにも役所、発注者側には地域建設業を守っていく姿勢を求めたいと考えています。

宮下支部





滝谷建設工業 株式会社
土木部　田崎　清喜

金山町滝スノーシェッドの災害復旧について

災害が発生した７月 27 日は、夕方に通常の勤務を終えて自宅に帰っていましたが、午後６時過ぎに防災無線で呼び出され、地元柳津町の消防団員として警戒態勢に入っていました。会社の体制も国道 252 号など国道、県道などバリケードによる通行止めの準備を始めていました。雨脚もそれほど強くなく通常の降り方でしたので、只見川が氾濫してこのような大災害になるとは予想もできませんでした。

国道 252 号金山町滝沢の滝スノーシェッドの復旧工事は９月１日に契約が行われ、私は契約当日に初めて金山地区と滝スノーシェッドの被災状況を確認し、その凄さに唖然としたことを記憶しています。

現地は、約 400 メートルあるスノーシェッドの半分、約 200 メートルの基礎工が大水により洗掘され、むき出し状態となっており、上部の屋根も波打つように大きく変形していました。当時は、流木がスノーシェッド内にも大量に流れ込み、天井部分まで積み重なっていたそうです。７月 29 日からは全面通行止めとなり、復旧工事が急がれている状況でした。

９月 12 日から復旧工事に着手しました。工事は、台座コンクリートを暫定で復旧しながら構台を設置する基礎工を構築し、構台を設置して片側交互通行が可能な状態にしました。一部上部工を撤去して、新規の基礎工事も同時に進めるという突貫工事で、10 月 17 日には片側交互通行により開放させることができました。

その後も夜間作業により、上部工の復旧作業をジャッキアップで１スパンごとに修正して元の位置まで復旧しました。上部工の歪みのため、最初はスムーズにジャッキアップできませんでしたが、思い切ってブレスを切断することでスムーズに揚げることができました。その後も夜間作業で構台を撤去し、一部の上部工を架設して表層工を施し、12 月 12 日に全面開放となりました。本格的な降雪前に開放することができてほっとしました。

工程厳守のため、日々の工程管理は非常に苦労しました。人員の確保や資材（Co）はジャストタイムに段取りしなければならないため、協力業者やコンクリート業者の皆さんには、残業や休日出勤など様々な苦労をおかけしました。また、突貫工事によるロスもあり、原価的にまったく合わない状況で、会社にも迷惑をかけてしまいました。

工程管理は毎週金曜日、会津若松建設事務所の道路課長、係長、担当者の方と当社から私と土木部長での打ち合わせにより工程調整していました。発注者には、現地で問題点があるとすぐに対応していただきましたので、工程の遅れなどはなかったと思います。

工期短縮のための突貫工事で、脱枠を必要としない鋼製メッシュ型枠を使用しました。また、コンクリートのレイタンス処理では、国土交通省 NETIS 登録の水洗いを必要としない環境にやさしいジョインテックスを使用するなどして、可能な限りの工期短縮を図りました。

今回の復旧工事を担当して、協力業者やコンクリート業者、製品会社の皆さんには、現場の復旧を最優先に対応していただきました。心から感謝しています。工事中には、高さ 2.8 メートル規制があるにもかかわらず、規制の看板をすり抜けて現場に侵入し、構台と衝突して損傷させられたことが何回もあり、運転手のマナーの悪さに呆れかえる事もありました。

今回の豪雨災害は、100 年に一度などと言われていますが、会津地区はこれからもインフラ整備は必要です。国道252号は只見川流域の大動脈で、命をつなぐ道です。７月29 日に三島町から只見町境まで通行止めとなり、12 月20 日の二本木橋の仮橋開通による通行止め解除まで、多くの住民が大変な苦労をしました。インフラ整備は確実に進めてほしい。しかし、インフラ整備や除雪など地域を支える建設業界に若い人が入ってきません。若者に魅力を感じてもらえる建設業となるため、関係する人たちが一緒になって対策をとっていかなければならないと考えています。



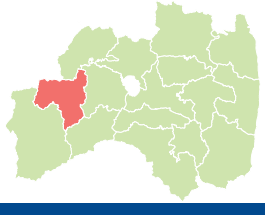
滝スノーシェッドジャッキアップ



滝スノーシェッド被災状況

新潟・福島豪雨災害対応における体験談

宮下支部





山十建設 株式会社

代表取締役　滝沢　康成

二本木橋周辺の災害対応について

23 年７月 28 日の早朝、金山町に大雨警報が発令されました。その後、直ちに宮下地区建設業協同組合を通して県から道路、河川のパトロールの指示があったことから、斜面崩壊などで道路に流出した土砂の撤去作業などに当たっていました。

29 日から各現場の復旧作業に入りました。近くの橋がほとんど流され、只見川沿いの田沢地区や西部地区は土砂崩壊で通行止めとなり、孤立してしまったために早急な流出土砂の撤去が必要でした。

大変な思いをした作業班もありました。早朝から JR 只見線上田駅近辺の土砂撤去を進めていた班は、夕方６時ごろ復旧が終わって会社に戻ろうと越川の大川地区まで来たが橋が冠水して渡れない。仕方なく車を道路わきの安全な場所に止めて、懐中電灯を照らしながら JR の線路を約３キロ歩いて事務所に戻りました。また別な班は、只見町の叶津地区で作業にあたっていましたが、現場から国道252 号へ出る道路が土砂崩れで動けなくなりました。携帯電話も通じない地区で、車の中で一晩明かしました。連絡が取れず、会社も社員の家族も不安な夜を過ごしたことを覚えています。早朝に出発しましたが、国道 252 号はいたるところで通行止めだったため、国道 289 号の南郷から昭和村経由で、２時ごろ事務所にたどり着くことができました。途中、只見町の黒谷川などの氾濫で道路規制が敷かれ、一般車両は通行できませんでしたが、復旧工事に取り掛かるため大至急事務所に戻らなければならないと、警察を説得して潜り抜けてきた班もありました。

29 日の夕方４時ごろ、消防団に出動の要請が入りました。当社の社員は消防団員も多く、仕事を切り上げ、消防団の仕事に移っていきました。雨はそれほど降っていないのに只見川の水位がどんどん上がってきたので不安になり、残った社員で事務所の大事な書類やコンピュータなどを道路向側の少し高台にある別事務所に運び出しました。

運搬している最中、確か６時半ごろだったと思いますが、県から川の水位が上がり危険なので、二本木橋の通行

止めの措置を取るよう連絡がありました。橋は事務所のすぐ隣にありましたので、消防団と残った社員で、住民の避難と交通誘導に当たっていました。停電になり、周りはもう真っ暗で、消防団の車のライトで川面を照らしていましたが、その間にもどんどん水かさが増してきて、二本木橋の下部工のアーチ部分に流されてきた木がぶつかる「ドン、ドン」という鈍い音が響いていて気持ちが悪くなりました。そして、確か７時半ごろだった思いますが、いきなり「バチーン」という何かが爆発するようなものすごい音が響いたと思ったら、一瞬橋が浮き上がり、その途端、真ん中から真っ二つに割れて川面に垂直に突き刺さったように見えました。私も含め、周りで見ていた社員たちも恐ろしい光景に声も出ませんでした。それから折れた橋桁は、ゆっくりと水平に戻りながら一本また一本と下流の方へ流されていきました。

これは大変なことになったと思っていたら８時過ぎに、横田地区に避難勧告が発令されました。「もう、どうしようもない」と、残っていた社員全員も指示された山入の鮭立地区にある、ふるさとむかし館の体育館に避難しました。すでに横田地区は停電していて、携帯電話も基地局の電源がストップしたため連絡も取れない状態でした。NTT と東北電力が発電車を出してくれて、31 日にようやく復旧しました。

30 日の昼過ぎは、横田地区の避難勧告が解除になったことから事務所に戻りました。床上浸水しましたが、それよりも会社の建物が残っていてほっとしたことを覚えています。その後は、自分も町消防団横田班の班長を務めていたことから、地区の被害状況の確認作業に当たりました。行方不明者もいなかったので、すぐに会社に戻り、道路の被災状況の確認を社員に指示しました。国道、県道、町道など道路はいたる所で冠水し、ドロドロの土砂や流木のため、とても走れるような状況ではありませんでした。

宮下土木事務所から道路確保の要請があったため、まず、只見町境の滝方面の土砂撤去に向かいました。ところが、滝スノーシェッドは基礎部分がえぐり取られ、只見川に崩れ落ちそうな状態で、土砂と流木が山のように積み重なっていました。土砂を取り除いても、スノーシェッドはとても通行できる状況ではなかったので、まずは通れる所からということで、横田から川口方面に向けての土砂撤去作業に取り掛かりました。川口から横田方面に向けては大和建設工業さんで、当社が川口方面に向かって撤去を開始しました。作業はタイヤドーザと２台のバックホウを使いましたが、ドーザでは完全に土砂を取りきれないため、通行確保後に再度、ダンプに水タンクを積んで散布しながらの路面洗浄を行いました。

集落内の土砂撤去は、機械が入れず苦労しましたが、毎日 50 人を超えるボランティアの人たちが協力してくれました。土砂を持っていく場が無いため、自社や協力会社の土場に土砂や水に浸かった家財道具、流木などを仮置きしました。







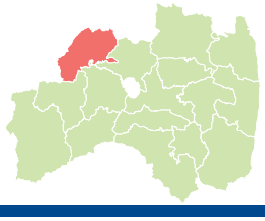


流木や土砂の撤去作業

社員は一人何役もこなしていました。会社、自分たちが住む地区、消防団などそれぞれ責任ある立場にいる社員が多く、何を優先すべきか、ジレンマを抱えながらも的確に対応してくれたと感謝しています。災害時の会社としての対応は組織化し、明確にはしていましたが、実際に行動できるかは未知数です。連絡も取れず不安の中にあっても、自分たちが地域を守るという使命感を持って取り組んでくれました。

建設業界は若手が入職せず、社員もどんどん減っています。災害への対応も含めて今必要なこと、何をすべきかを関係者が一緒になって考えていくことが大切だと考えます。

喜多方支部





株式会社 丸正
部長　菊地　達男

混乱の中、道路の応急対応に全力

普段はモスグリーンのゆったりした阿賀川の流れが、これまで見たことのない濁流で、喜多方市高郷に 80 年住むというお年寄りも、「こんなのは初めてだ」と話していました。それもそのはず、阿賀川に合流する只見川上流では、7 月 27 日の降り始めから 7 月 30 日正午までに 711 ミリの驚異的な雨量を観測。阿賀川上流も雨が降り続き、それが勢いを増しながら下流に向かっていました。会津の 9 市町村に災害救助法が適用される事態となりました。

7 月 28 日、29 日あたりは、とても川の近くまで行ける状態ではありませんでした。水位が下がり、雨が上がり、水が引き始めたころ、協力会社からも人員を集め、昼夜を問わずの応急対応が始まりました。

県道西会津喜多方線、新郷荻野停車場線などの生活道路が寸断。行政も混乱しているのが分かりました。どの情報が正しいのか。迷いというよりも、どれをどう判断したらいいのか。道路は、通行不能区間を 1 カ所ごと固めて、また次の場所へといった具合に進めました。通行止めの表示板など、夜中に看板屋さんに連絡し、翌日には道路に表示できるよう対応しました。

県道喜多方西会津線・釜の脇スノーシェッドは下部工が洗掘されていました。道路が浮いているような状態で、その周辺を点検しながら、今後、進められる調査、本復旧に向けた足場設置、仮の補強を進めました。がらんどうとなった下部工部分を何度も点検に行くわけで「あまり気持ちのいいものではなかった」。危険性を伴うため、一人作業にならないよう言い続けました。

荻野漕艇場付近も河岸が崩れ、えぐりとられた痛々しい被害状況が目に飛び込みました。これは時間がかかる。まずは、住民から「早く通して」と言われている道路の一時回復に向かわざるを得ませんでした。

時間の経過とともに復旧が進みましたが、「とにかく早く道路を通れるようにしてほしい」といったその時の住民の声。難しい状況の中、これに応えることができたと信じています。

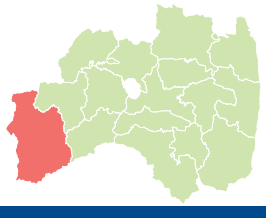


下部工が洗掘されたスノーシェット



被災後の新郷荻野停車場線

山口支部





大正工業 株式会社
代表取締役　三瓶　吉夫

地域の力で非常事態を乗り切る

最近の大雨を降らせる気象状況があるとはいえ、これほどの水量は見たことがありません。しかも、上流部の只見町で。非常事態であることはだれもが分かりましたが、その後、どう動いたか。年寄りを避難させる、危険な場所から逃げるなど。これは、お互いをよく知り、この地域で長く生活した者同士だからこそできたのかもしれません。しかも日常､重機を動かし､自然災害と格闘している者であったからこそ、だれに指示されることなく、応急作業に対応できたと思います。

7月29日の夜、孤立する集落から住民を救助するため自衛隊が入ると行政から連絡があり、道路を塞ぐ土砂を撤去して緊急に輸送路を確保することが必要になりました。沢という沢から土砂が流れ出た印象です。最終的には、道路が寸断されたためヘリコプターが救助に向かう。しばらくすると、電話、電気も寸断。夜は伊南川沿いの社屋で待機するも、連絡網が寸断する中、この非常事態に常識的な判断は通用しないと判断。知人の充電器などをかき集め、携帯電話がつながる場所に移動し、郡山、喜多方などから機械を集めるよう指示しました。

いくら機械の台数があっても足りないと思いました。それでもかき集めた機械は12台。町内で数十台でしょうか。



水が引いた黒谷川左岸（８月８日）



自動車も土石流に流された熊倉地内

連絡網が絶たれる中で、指示がなく、その場その場で役割を果たした社員、運転手。こうした日ごろの段取り、経験が染み付いた人たちが、地域そのものを支えているとも感じました。

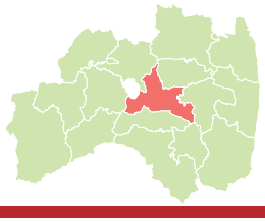
水が下がるとすぐに、河川上流の集落に向かう道路の応急対応が始まりました。黒谷川左岸の黒谷倉谷線は道路が流され、盛土し車両が通れる状態に復旧しました。

また、国道252号には町外から車で訪れていた観光客が一時、田子倉ダム上流に取り残されました。ちょうど、付近で現場が稼動していたため作業者がいたのが幸いでした。緊急用のダムのエレベーターを使い、山から下りることができました。もちろん車は取り残され、数カ月後に引き取りに行ったのは言うまでもありません。

河川や沢にしても、ここまで整備していたから、あの恐ろしい豪雨災害もひとまず乗り越えることができました。もし、必要な場所にコンクリートの堤防がなければ、砂防がなければ、これでは済まなかったとも考えられます。

その後の復旧工事も、トラックや河川の石積み職人が北海道などからも集まり、地区住民の協力もあり進んでいます。

郡山支部





福島県建設業協会 郡山支部
支部長　佐藤　彰宏

台風 15 号の復旧対策

台風 15 号襲来

平成 23 年 9 月の台風 15 号は、郡山市内で床上浸水 1,510 件、床下浸水 157 件、非住家浸水 230 件など、住宅・店舗 1,897 件の被害をもたらしました。

郡山市は過去に、昭和 61 年災害と平成 10 年災害の大雨による大規模水害を被っておりますが、台風 15 号災害では、阿武隈川の水位が阿久津観測所で 9.25m と過去最高を記録し、各所で浸水被害が発生しました。

昼夜にわたる内水対策

市内では、9 月 20 日の午後 4 時に大雨警報が発令。翌 21 日から降り出した雨は、会員各社が警戒する中、午後 1 時 45 分に洪水警報発令に至りました。市内各所で水が溢れ、21 カ所の水門にある内水排除用のポンプによる排水作業のほかに、土のう設置作業等で各社が対応に追われました。

夜間には、阿武隈川の水位も越水するほどに増加し、阿武隈川に流入する支川は本線に流れ入ることができず、逆流して越水をもたらし始めたため、堤防に土のうを積むなどの対応に追われました。

22日午前 4 時半に大雨警報、午後 0 時 14 分に洪水警報が解かれました。21日の降水量は、過去最高となる 1 日当たり 174.5㎜となりました。

人海戦術

9 月 25 日土曜日、郡山市副市長から昭和町、小原田町等の地区で、床上浸水した家屋の家財撤去や土砂撤去作業の要請を受けました。災害協定に基づき、福島県建設業協会郡山支部のほか一般社団法人こおりやま建設協会、郡山市下水道工事協同組合は会員各社に依頼して人員の確保を行いました。同日正午に地区内の古川ポンプ場前に集合し、約 50 社、100 人で作業を開始しました。

同地区は、阿武隈川と東部幹線に挟まれた区間で、かなりの人家が被害を被っておりました。翌 26 日日曜日からは 100 社、200 人の体制で、作業が完了するまで協力することを決定しました。また、郡山市からも 200 人の職員の協力を得ることで、予想よりも早い約 1 週間で作業を終えることができました。



古川ポンプ場前



家財撤去の様子

平成 23 年災害対応体験談集

その時、建設業は

緊急出動・対応の記録

平成 25 年（2013 年）5 月
発　行　一般社団法人 福島県建設業協会
〒 960-8061 福島県福島市五月町 4-25
福島県建設センター 3F
TEL 024-521-0244
FAX 024-522-4513
http://www.e-fukuken.or.jp/
E-mail　info@e-fukuken.or.jp